



Title	＜翻訳＞アルムファッダリーヤート試訳（IX-XVII）
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2011, 9, p. 1-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105933
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムファッダリーヤート試訳

— (IX) ムタンミム・ブヌ・ヌワイラ —

池田 修*

まえがき

この詩人の詩は、本詩集の LXVII および LXVIII にも取り上げられている。この詩は詩人の兄 Mālik の作としている者もある。すなわち al-Buḥturī の al-Ḥamāsa では Mālik の詩とされている。また、この詩集の al-ʿAnbārī による解説書 pp. 719-720 には al-ʿAṣmaʿī が Mālik の作であると指摘している。Mālik は A.H. 11 年、al-Buṭāḥ での戦闘で Khālīd b. al-Walīd の命令により、Dirār b. al-ʿAswad al-ʿAzdī に殺された。

詩人と Mālik 兄弟はタミーム系の有力部族 Yarbūʿ b. Ḥaṇẓala 族の指導者で、本拠地は Fayd の東側から並行する Ajaʿ と Salmā の山地にはさまれた平原の東端までひろがっていた。Mālik はよほどの有力者であつたらしく、預言者は彼の部族がイスラームを受け入れると、彼をハンザラ族全体のサダカの徴税人に任命している。ただし、この詩は彼ら兄弟いずれの作であってもイスラーム色に染まらない、ジャーヒリーヤ詩である。

彼の本名は、

متمم ابن نورة بن جمرة بن شداد بن عبيد بن ثعلبة بن يربوع بن حنظلة بن زيد مناة بن
تميم بن مر بن اد طابخة بن الياس بن مضر بن نزار

Mutammim という彼の名は maysir ゲームに由来するものである。このゲームはコーランで酒や偶像崇拝とともに厳禁されているが、ジャーヒリーヤ時代には良く行われていた。まずラクダを屠殺して、各部位を刻んだ矢を10矢ずつに準備しておいて、ゲームの参加者がくじ引きの要領で矢を選び抜き、進行役がこれに基づいて、各自の受け取る部位を確定してゲームは終わる。ラクダを10に切り分け、参加者も10人にするやり方、または10本の矢のうち3本は空くじにするなど、やり方も一様ではなかったらしい。またゲームをする時期は、食べ物が欠乏する冬であつたらしく、有力者が人々に気前よさを見せるのに利用されたと言われる。このゲームの進行役を yāsir とか mutammim とか mufīd al-qidāḥ とかと言った。

この詩は常套的な形式によるもので、まず女性について言及、ついで雌ラクダに乗って旅に出る。ラクダと野生のロバとの比較、次に馬と酒宴へと語り継ぎ、最後に人生観や人生の回想で終わる。彼の人生観はタラファの muʿallaqa と重なっており、人生は死で終わるとし、来世観は欠けている。kāmil 調、45行。

* 大阪外国語大学 名誉教授

(IX) テキスト

وَقَالَ مُتَمِّمُ بْنُ نُؤَيْرَةَ

- ١- صَرَمْتُ زُنَيْبَةَ حَبْلٍ مَنْ لَا يَفْطَعُ
- ٢- وَلَقَدْ حَرَصْتُ عَلَى قَلِيلٍ مَتَاعِهَا
- ٣- جُذِيَ حَبَالُكَ يَا زُنَيْبَ فَإِنِّي
- ٤- وَلَقَدْ قَطَعْتُ الْوَصْلَ يَوْمَ خِلَاجِهِ
- ٥- بِمُجِدَّةٍ عَنِّي كَانَ سَرَاتِهَا
- ٦- قَاطَتْ أَثَالَ إِلَى الْمَلَا وَتَرَبَّعَتْ
- ٧- حَتَّى إِذَا لَقِحتْ وَعُولِي فَوْقَهَا
- ٨- قَرَّبْتُهَا لِلرَّحْلِ لَمَّا اعْتَادَنِي
- ٩- فَكَأَنَّهَا بَعْدَ الْكَلَالَةِ وَالشَّرَى
- ١٠- يَحْتَازُهَا عَنْ جَحْشِهَا وَتَكْفُفُ
- ١١- وَيَظَلُّ مُرْتَبِّئًا عَلَيْهَا جَاذِلًا
- ١٢- حَتَّى يُهَيِّجَهَا عَشِيَّةَ حِمْسِهَا
- ١٣- يَغْدُو تَبَادُرُهُ الْمَخَارِمَ سَمَحَجَ
- ١٤- حَتَّى إِذَا وَرَدَا غُيُونًا فَوْقَهَا
- ١٥- لَاقَى عَلَى جَنْبِ الشَّرِيعَةِ لَا طِيًّا
- ١٦- فَرَمَى فَأَخْطَأَهَا وَصَادَفَ سَهْمُهُ
- ١٧- أَهْوَى لِيَحْمِيَ فَرَجَهَا إِذْ أَدْبَرَتْ
- ١٨- فَتَضُّكَ صَكًّا بِالسَّنَائِكِ نَحْرَهُ
- ١٩- لَا شَيْءَ يَأْتُو أَتَوْهُ لَمَّا عَلَا
- ٢٠- وَلَقَدْ غَدَوْتُ عَلَى الْقَنْيِصِ وَصَاحِبِي
- ٢١- ضَافِي السَّيِّبِ كَانَ غُصْنِ أَبَاءَةٍ
- ٢٢- تَبِيقُ إِذَا أَرْسَلَهُ مُتَقَادِفٌ
- حَبْلَ الْخَلِيلِ وَلِأَمَانَةٍ تَفْجَعُ
- يَوْمَ الرَّحِيلِ فَدَمَعُهَا الْمُسْتَنْفَعُ
- قَدْ أَسْبَدُ يَوْصِلُ مَنْ هُوَ أَقْطَعُ
- وَأَخُو الصَّرِيمَةِ فِي الْأُمُورِ الْمُزْمِعُ
- فَدَنْ تَطِيفُ بِهِ النَّيْطُ مُرْفَعُ
- بِالْحَرَنِ عَارِبَةٌ تُسَنُّ وَتُودَعُ
- قَرِدُ يُهْمُ بِهِ الْعَرَابُ الْمَوْقِعُ
- سَفَرُ أَهْمُ بِهِ وَأَمْرُ مُجْمَعُ
- عَلَجَ تُعَالِيهِ قَذُورٌ مُلْمِعُ
- عَنْ نَفْسِهَا إِنَّ الْيَتِيمَ مُدْفَعُ
- فِي رَأْسِ مَرْقَبَةٍ وَلَا يَأِيَّ يَرْتَعُ
- لِلْوَرْدِ جَابُ خَلْفَهَا مُتَتَرِّعُ
- كَالدَّلْوِ خَانَ رِشَاؤُهَا الْمُتَفَطِّعُ
- غَابَ طَوَالَ نَابِتٍ وَمُصَرَّعُ
- صَفْوَانٍ فِي نَامُوسِهِ يَتَطَلَّعُ
- حَجَرًا فَقُلِّلَ وَالنَّضْيُ مُجَزَّعُ
- زَجَلًا كَمَا يَحْمِي النَّجِيدُ الْمُشْرِعُ
- وَبِجْنَدِلِ ضُمٌّ وَلَا تَتَوَرَّعُ
- فَوْقَ الْقَطَاةِ وَرَأْسُهُ مُسْتَلْبَعُ
- نَهْدُ مَرَائِكِلُهُ مَسَحَّ جُرْشُعُ
- رَيَّانٌ يَنْفُضُهَا إِذَا مَا يُقْدَعُ
- طَمَاحُ أَشْرَافٍ إِذَا مَا يُنْرَعُ

- ٢٣- وَكَأَنَّهُ فَوْتَ الْجَوَالِبِ جَانِبًا
 رُبَّمَا تَصَايِفُهُ كَلَابٌ أَخْضَعُ
 ٢٤- دَاوَيْتُهُ كُلَّ الدَّوَاءِ وَرَدَّتْهُ
 بَذَلًا كَمَا يُعْطَى الْحَبِيبُ الْمُوسِعُ
 ٢٥- فَلَهُ ضَرْبُ الشَّوْلِ إِلَّا سُورَهُ
 وَالْجُلُّ فَهُوَ مُرَبَّبٌ لَا يُخْلَعُ
 ٢٦- فَإِذَا نُرَاهِنُ كَانَ أَوَّلَ سَابِقِ
 يَخْتَالُ فَارِسُهُ إِذَا مَا يُدْفَعُ
 ٢٧- بَلْ رَبُّ يَوْمٍ قَدْ حَبَسَنَا سَبْقَهُ
 نُعْطَى وَنُعْمِرُ فِي الصَّدِيقِ وَنَنْفَعُ
 ٢٨- وَلَقَدْ سَبَقَتْ الْعَادِلَاتُ بِشَرْبَةِ
 رِيًّا وَرَأُووقِي عَظِيمٍ مُتْرَعُ
 ٢٩- جَفْنُ مِنَ الْغُرَيْبِ خَالِصٌ لَوْنِهِ
 كَدَمُ الذَّبِيحِ إِذَا يُشْنُ مُشْمَعُ
 ٣٠- أَلْهُو بِهَا يَوْمًا وَالْهَى فَنِيَّةُ
 عَنِ بَثِّهِمْ إِذْ أَلْبَسُوا وَتَفَنَّنُوا
 ٣١- يَا لَهْفَ مِنْ عَرْفَاءَ ذَاتِ فَلِيلَةٍ
 جَاءَتْ إِلَيَّ عَلَى ثَلَاثٍ تَخَمَعُ
 ٣٢- ظَلَّتْ تُرَاصِدُنِي وَتَنْظُرُ حَوْلَهَا
 وَيُرِيئُهَا رَمَقٌ وَأَنَّى مُطْمَعُ
 ٣٣- وَتَظَلُّ تَنْشِطُنِي وَتُلْحِمُ أَجْرِيَا
 وَسَطَ الْعَرِينِ وَلَيْسَ حَتَّى يَدْفَعُ
 ٣٤- لَوْ كَانَ سَيْفِي بِالْيَمِينِ ضَرْبَتْهَا
 عَنِّي وَلَمْ أُؤْكَلْ وَجَنَّبِي الْأَضْيَعُ
 ٣٥- وَلَقَدْ ضَرَبْتُ بِهِ فَتُسْقِطُ ضَرْبَتِي
 أَيْدِي الْكُمَاةِ كَأَنَّهُنَّ الْخِرُوعُ
 ٣٦- ذَاكَ الضَّمَاغُ فَإِنْ حَزَزْتُ بِمُدِيَّةِ
 كَفَى فَقُولِي مُحْسِنٌ مَا يَصْنَعُ
 ٣٧- وَلَقَدْ غُبُطْتُ بِمَا أَلَاقِي حِقْبَةً
 وَلَقَدْ يَمُرُّ عَلَيَّ يَوْمٌ أَشْنَعُ
 ٣٨- أَفْبَعْدَ مَنْ وَلَدَتْ نُسَيْبَةُ أَشْتَكِي
 زَوْءَ الْمَنِيَّةِ أَوْ أَرَى أَتَوَجَّعُ
 ٣٩- وَلَقَدْ عَلِمْتُ وَلَا مَحَالَةَ أَنَّنِي
 لِلْحَادِثَاتِ فَهَلْ تَرَيْنِي أَجْزَعُ
 ٤٠- أَفَتَيْنَ عَادًا ثُمَّ آلَ مُحَرِّقِ
 فَتَرَكْنَهُمْ بَلَدًا وَمَا قَدْ جَمَعُوا
 ٤١- وَلَهُنَّ كَانَ أَخُو الْمَصَانِعِ تَبْعُ
 وَفَعَدْتُ آبَائِي إِلَى عِرْقِ الثَّرَى
 ٤٢- فَهَبُوا فَلَمْ أُدْرِكْهُمْ وَدَعَتْهُمْ
 فَدَعَوْتُهُمْ فَعَلِمْتُ أَنَّ لَمْ يَسْمَعُوا
 ٤٣- لَا بُدَّ مِنْ تَلْفٍ مُصِيبٍ فَاَنْتَظِرْ
 غُولٌ أَتَوْهَا وَالطَّرِيقُ الْمَهْيَعُ
 ٤٤- وَلَيَأْتِينَ عَلَيْكَ يَوْمٌ مَرَّةً
 أَبَارِضِ قَوْمِكَ أَمْ بِأُخْرَى تُضْرَعُ
 ٤٥- يُنْكِي عَلَيْكَ مُقَنَّعًا لَا تَسْمَعُ
 يُنْكِي عَلَيْكَ مُقَنَّعًا لَا تَسْمَعُ

(IX) 訳

- 1- ズナイバ¹⁾は愛する者の絆を切らない男との絆を断った。ために彼女は信頼を失い苦しむ。
- 2- 私が離別の日、心底願ったのは彼女のわずかな心づかいであったが、彼女は目に涙を浮かべただけで流してはいなかった。
- 3- ズナイバよ、そなたは私との絆を切るがよい。私は私との絆を切る者とのかかわりはもはや求めず、自分だけで処理する。
- 4- 私は彼女とのかかわりに疑いを持った日、彼女への思いを断った。ことに当たって強靱な精神の持ち主こそ決然たる男である。
- 5- (私は彼女への思いを) 頑強な雌ラクダに乗って(旅に出ることによって断つのである) このラクダのコブはナバテア人が周囲を巡る高層の建物のように高く聳えている。
- 6- ラクダは夏はウサルからアルマラー²⁾にいたる土地で過ごし、春にはでこぼこした高原で労役を離れて草を食み、ために丸々と太っている。
- 7- ラクダが子を孕むと背のコブは一段と高く盛り上がり³⁾、カラスも滑るのを恐れてとまるのを控える。
- 8- 私は旅に出ようと思い立ったときや、何かをやり遂げようと決心したときには、このラクダを鞍のそばへつれて行く。
- 9- このラクダは長い夜旅で(他のラクダが)疲労した後でも衰えを知らず、まるで張って光沢のある乳房を抱える⁴⁾野生のラバと並走している雄ロバのようであった。
- 10- 野生の雄ロバは雌ロバから子を離す⁵⁾。また雌ロバも子を近づけようとしない。まことに、親のない子は卑しめられるものだ。
- 11- 雄ロバは一日中、見晴らしのよい高台にすつくと立って⁶⁾雌ラバを見張っていて、ほとんど牧草を食べない。
- 12- 三日間草を食べた後四日目の夕方になると頑強な雄ロバは雌ロバを水場へとかりたて⁷⁾、その背後を急ぎ駆け下りる。
- 13- 雄ロバが走りこれと競うように雌ロバが、崩れた稜線を先に駆け下りるが、ま

1) zunayba は zaynab の変則縮小形。

2) ʿUḥāl と al-Malā は、いずれも地名で、夏でも水が豊かな Yarbūʿ 族の領域。al-ḥazn は石ころの多い丘陵地で、冬と春に雨が降り牧草が良く生える。Yarbūʿの al-ḥazn は最良の牧草地と云われている。(ヤーカート『地名辞典』)

3) ラクダは最初に受胎したときが一番元気で、コブが盛り上がり、長旅に耐える忍耐力をそなえていると見なされていたようだ。

4) 「張って光沢のある乳房」とは妊娠していることを示している。

5) 野生の雄ロバは非常に嫉妬深く、自身の子を母ロバから引き離しにかかる。このようにして引き離されたロバの子を yatim (孤児) と呼んでいる。

6) al-ʿAnbārī は jādhil-an を jādhil-a (喜ぶ) の分詞と説明しているが、jadhil-a (立つ) の分詞として訳した。

7) 野生のロバは水を飲むと、その後、3日間は草を食べ、4日目に水場に来る。

- るで綱が思わず切れて汲み上げバケツが井戸の中に落ちるほどの速さであった。
- 14- やがて雌雄のロバは泉に到着したが、そこには葦の茂みがあり⁸⁾、長く伸びたものや、折れ曲がったものがあった。
- 15- 雄ロバは水辺に通じる道のそばの小屋に獵師のサフワーン⁹⁾ が身を潜め、獲物を見張っているのにきづいた。
- 16- 獵師は雌ロバを弓で射たが的はずれ、矢¹⁰⁾ は石に当たって先端がへこみ、矢は粉々に折れてしまった。
- 17- 雌ロバが驚いて背を向けようとして逃げたとき、雄ロバはいななき、雌ロバの臀部を守ろうとした。まるで味方を守るために戦闘に突入する勇士のようであった。
- 18- 雄ロバはひずめと逃げ足が飛ばす固い石を雌ロバの喉に当てながらひるまずに走り去った¹¹⁾。
- 19- 雄ロバが雌ロバをかばう振る舞いに匹敵するものはない。雄ロバが雌ロバの臀部に乗りかかると、頭は雌ロバの背中を覆うのである。
- 20- 私は朝狩によく出かけたものだ。伴うのは横腹が良く張った駿足で頑強な体格の馬であった。
- 21- 豊かな尾の毛は長く伸び、押し留められると柔らかな葦の茂みの枝を空中でふり落とそうとしているようであった。
- 22- 馬を駆けさせようとするすると鋭く飛び出す。また手綱で引き留められると、上を見上げて疾駆しようとする。
- 23- 競馬にあたっては、はやし立てる人々をやり過ぎし真っ直ぐ首を伸ばしてかける¹²⁾。その姿は犬どもに両側から攻め寄せられ、頭を下げて（すきがあれば角で突こうとしながら）駆けるカモシカのようなものである。
- 24- 私はこの馬を手をつくして看護したえ、富者が愛する者に与えるように十分な糧をあてがった。
- 25- 即ち、馬には妊娠7カ月の雌ラクダの乳が与えられ、残りわずかは（我々が飲む）。また、馬はテントのなかで養われていて、馬衣を脱がされることはない¹³⁾。
- 26- 賭け競馬においては、この馬がいつも他を抜いて一着となる。ために、この馬の騎手は競技に当たっては常に誇らしげである。
- 27- われらは、なんと多くの日、馬が稼いだ賞金を手元にとどめ、親友に生涯にわ

8) 泉に茂みがあることは、水を飲みに来る動物にとっては恐怖のもとであった。肉食獣や獵師が潜んでいるからである。

9) Ṣafwān は伝説上の有名な獵師。

10) naḍī は羽もやじりもついていない矢。

11) 解説では「ひずめが固い石のようであった、そのひずめで雄ロバをけた」となっているが、「先行する雌ロバが足で飛ばした石が後続の雄ロバにあたった」と解釈するほうが自然。

12) 競馬では重要な地点に人々が待機して、やってくる馬をはやしたてる。ここでコースを誤らせると、Abs 族と Dhubyān 族の間で長年争った Dāhis の日のような戦争になりかねない。

13) 戦闘に出る馬は自由に放牧せず、テントのなかでラクダの乳などを飲ませて待機させた。

たって与え、人々に利したことであろう¹⁴⁾。

28- 私は（私の浪費癖を）責める女たちに先がけて、ぶどう酒をぐいと一杯飲んだ。
私の酒壺は大きく酒が満ちていた。

29- 澄み切った色合いの黒ブドウの樹から生まれた良質のブドウ酒は、水割りにして注がれるといけにえの血のように真っ赤になる。

30- 私はある日気晴らしのためにこの酒を飲み、（悲しみに包まれていた）若者たちにも、この酒を振る舞い、悲しみを忘れさせた。

31- ああ悲しいかな、首にふさふさとした毛を生やしているたてがみの主、ハイエナよ、三本足でびっこを引きながら私を狙ってきた。

32- ハイエナは私を見張りながら、あたりにも目配りし、まだ最後の息があるのではとの疑念に襲われたじろいでいる。だが狙っているのはまぎれもなく私である。

33- ハイエナは私を引っ張っていき、巢穴の中で子らに肉を食べさせるが、これを防ぐ生き物は皆無である。

34- 私がもしも右手に剣を握っていたなら、ハイエナを切りつけて寄せ付けず、そばに救い手がいなくとも食べられることはなかっただろう。

35- 事実、私は剣で切りつけたものだ。私の一撃は武装した勇者らの手をまるでやわらかいヒマを切るように楽々と切り離したものである。

36- それが滅亡というものだ。たとえ私が短剣で手を切り落そうと、（私の浪費癖を非難する女よ）非難するのを止めて“彼の生き様は見事だ”と言うがよい¹⁵⁾。

37- 私は長年人々にうらやましがられる幸運に恵まれてきたが、いずれ悲惨な日に遭遇するかも知れない。

38- ヌサイバ¹⁶⁾ が産んだ者達が死んだ後、私は運命を嘆き、苦しんでいるところを人々に見られてよいものか。否。

39- 私は運命に翻弄される標的であって、これは避けられないものであることはよく承知している。そなたは私がそれを悲しんでいると思っているのか。

40- 運命はアードの民¹⁷⁾ を消滅させ、また、ムハッリク一家を滅ぼし、彼らと彼らが集積したものをすべて何もない荒地にしてしまった。

41- 同様に両アルハーリス王¹⁸⁾ はいずれも、さらに巨大な宮殿を築いたトッパウの王たちもすべて運命の餌食となった。

14) na-nfa^c-u の意味が今ひとつ不明。「人々に利する」と訳した。

15) どうせ死ぬ身、浪費浪費と言って非難するな。ハイエナに食われようが、手を切り落そうが死はさけられず、それまで自由に振舞う。Tarafa の *mu'allāqa* と通じ合う死生観。

16) Nusayba は詩人や Mālik 兄の母、これからすると、兄弟はみんな死に絶えたようである。詩人は、残された自分が遺産を思いどおりに使って何処が悪いか、と言っているようだ。

17) 'Ād の民はコーランにもたびたび登場するアラブの古代の伝説上の民。Muḥarriq 一族とはラフム朝の王家。この詩人の生きた頃には滅んでいた。（最後の王は al-Nu'mān 'Abū Qābūs [605年頃]）

18) 「両アルハーリス」とはガッサーン朝の大 al-Hāris [529-569]とその後を継いだ小 al-Hāris [569-581?] の二人の王のこと。トッパウは Himyar の王家。gumdān とか raydān などと呼ばれる巨大な石造宮殿を立て、中央さらには北アラビアの遊牧民に威勢をみせていた。

- 42- 私は、私の父祖も土の根（アダム）¹⁹⁾のもとに帰った者として数え上げた。彼らには聞こえないと知りながら、私は彼らに声を掛けてみた。
- 43- だが、彼らは過ぎ去り、私は追いつけなかった。死という災難が彼らを招き、彼らはこれに応じた。誰もが歩む死への道は広い。
- 44- 何人も死の襲撃から逃れることはできない。よってこれを待て。君の民の下にあっても、旅の途上にあっても死はまぬがれぬ。
- 45- やがて、君が経帷子に包まれて、人々が泣く日が必ず訪れるが、君には聞こえないだろう。

19) *‘irq al-tharā*（土の根）とは人類の祖アダムのこと。つまり、「詩人の父祖はすべて死に絶え 土に帰った」の意味。

— (X) バシャーマ・ブヌ・アムル —

まえがき

この詩人は、ムアッラカ詩人として有名な Zuhayr b. ʿAbī Sulmā の母方の叔父にあたる。彼は裕福であったが子がなく、臨終を迎えると、一族の者に遺産を分け与え始めた。そこへズハイルがやってきて、遺産を分けて欲しいと頼むと、彼は“甥子よ、お前には最善のものを残しておいた、つまり私の詩だ。これを受け取ってくれ。”と答えたといわれている。

この詩は Huraqa の戦いに寄せて詠まれたものとされている。この戦いはズブヤーン系の Sahm と Ṣirma 両家の争いであった。Sahm 家の指導者は al-Ḥuṣayn b. al-Ḥumām で、一門のうち ʿAbd ʿAmr ʿUdwān の兄弟家は中立を保った。詩人は残った Sahm の兄弟一門 Wāthila の指導者で、al-Ḥuṣayn に加担して、Ṣirma 家に対抗した。なお、ここであげた al-Ḥuṣayn b. al-Ḥumām は詩人として、本詩集の XII と XV に登場する。Huraqa の戦いは Dārat Mawḍūʿ という地で行われたので、この地名の戦いとも言われるが、年代は不明である。

この詩はアラブ古詩の芸術的慣行に従っている点で典型的なものである。即ち、詩人がこの詩で主張したかったのは28-37行であって、1-9行は愛の序詩、10-27行はラクダの描写となっている。mutaqārib 調、37行。詩人の本名は次の通り。

بشامة بن الغدير و الغدير هو عمرو بن تلال بن سهم بن مرة بن عوف بن سعد بن ذبيان
ابن بغيض بن ريث بن غطفان

(X) テキスト

وَقَالَ بَشَامَةُ بْنُ عَمْرِو

- | | |
|--|--|
| وَحَمَلَكَ النَّأْيُ عَيْنًا ثَقِيلًا | ١- هَجَرْتَ أُمَامَةً هَجْرًا طَوِيلًا |
| خَيَالًا يُوَافِي وَنِيْلًا قَلِيلًا | ٢- وَحُمِلْتَ مِنْهَا عَلَى نَائِيهَا |
| إِذَا مَا الرِّكَائِبُ جَاوَزَ مِيلًا | ٣- وَنَظْرَةً ذِي شَجَنِ وَامِقٍ |
| فَقُلْنَا لَهَا قَدْ عَزَمْنَا الرَّحِيلًا | ٤- أَتَتْنَا تُسَائِلُ مَا بَثْنَا |
| نَ مِنْ مُنْذُ ثَوَى الرِّكْبِ عَنَّا غَفُولًا | ٥- وَقُلْتُ لَهَا كُنْتُ قَدْ تَعَلَّمِي |
| مِنَ الدَّمْعِ يَنْضَحُ خَدًّا أَسِيلًا | ٦- فَبَادَرَتَاهَا بِمُسْتَعْجِلٍ |
| مِنَ الْقَوْلِ إِلَّا صِفَاحًا وَقِيلًا | ٧- وَمَا كَانَ أَكْثَرُ مَا نَوَلْتُ |
| مُعِدُّ لَهُ كُلَّ يَوْمٍ شُكُولًا | ٨- وَعَذَرْتُهَا أَنَّ كُلَّ أَمْرِي |

- ٩- كَأَنَّ النَّوَى لَمْ تَكُنْ أَصْقَبْتُ
 وَلَمْ تَأْتِ قَوْمَ أَدِيمٍ حُلُولًا
 ١٠- فَمَرَبْتُ لِلرَّحْلِ عَيْرَانَةً
 عُدَافِرَةً عَنْتَرِيَّسًا ذُمُولًا
 ١١- مُدَاخِلَةَ الْخَلْقِ مَضْبُورَةً
 إِذَا أَخَذَ الْحَاقِقَاتُ الْمَقِيلَا
 ١٢- لَهَا قَرْدٌ تَامِكٌ نَيْهٌ
 تَزِلُّ الْوَلِيَّةُ عَنْهُ زَلِيلًا
 ١٣- تَطَرَّدُ أَطْرَافَ عَامٍ خَصِيبٍ
 وَلَمْ يُثْلِ عَبْدٌ إِلَيْهَا فَصِيلًا
 ١٤- تَوَقَّرُ شَاوِرَةً طَرْفَهَا
 إِذَا مَا ثَنَيْتَ إِلَيْهَا الْجَدِيلَا
 ١٥- بَعَيْنٍ كَعَيْنٍ مُفِيضِ الْقِدَاحِ
 إِذَا مَا أَرَاغَ يُرِيدُ الْحَوِيلَا
 ١٦- وَخَادِرَةٍ كَنَفَيْهَا الْمَسِيبِ
 حُ تُنْضَحُ أَوْبَرَ شُثَا غَلِيلَا
 ١٧- وَصَدْرٌ لَهَا مَهْيَعٌ كَالْخَلِيفِ
 تَخَالُ بِأَنَّ عَلَيْهِ شَلِيلَا
 ١٨- فَمَرَّتْ عَلَى كُشْبٍ عُذْوَةٍ
 وَحَازَتْ لَهَا مَهْيَعٌ كَالْخَلِيفِ
 ١٩- تَوَطَّأُ أَغْلَظَ حِرْزَانِهِ
 وَحَازَتْ لَهَا مَهْيَعٌ كَالْخَلِيفِ
 ٢٠- إِذَا أَقْبَلْتُ قُلْتُ مَذْعُورَةً
 كَوَاطِءُ الْقَوِيِّ الْعَزِيزِ الدَّلِيلَا
 ٢١- وَإِنْ أَدْبَرْتُ قُلْتُ مَشْحُونَةً
 مِنْ الرُّمْدِ تَلْحَقُ هَيْقًا ذُمُولًا
 ٢٢- وَإِنْ أَعْرَضْتُ رَأَى فِيهَا الْبَصِيرِ
 أَطَاعَ لَهَا الرِّيحُ قَلَمًا جَفُولًا
 ٢٣- يَدًا سُرْحًا مَائِرًا ضَبْعَهَا
 رُ مَا لَا يُكَلِّفُهُ أَنْ يَفِيلَا
 ٢٤- وَعُوجًا تَنَاطَحْنَ تَحْتَ الْمَطَا
 تَسُومُ وَتَقْدُمُ رَجُلًا زَجُولًا
 ٢٥- تَعُزُّ الْمَطَى جِمَاعَ الطَّرِيقِ
 وَتَهْدِي بِهِنَّ مُمَاشَا كُهُولًا
 ٢٦- كَأَنَّ يَدَيْهَا إِذَا أَرْقَلْتُ
 إِذَا أَدْلَجَ الْقَوْمُ لَيْلًا طَوِيلَا
 ٢٧- يَدَا عَائِمٍ خَرَّ فِي غَمْرَةٍ
 وَقَدْ جُرْنَ ثُمَّ اهْتَدَيْنِ السَّبِيلَا
 ٢٨- وَخُبْرْتُ قَوْمِي وَلَمْ أَلْقُهُمْ
 قَدْ أَدْرَكَهُ الْمَوْتُ إِلَّا قَلِيلَا
 ٢٩- فَإِنَّمَا هَلَكْتُ وَلَمْ آتِيهِمْ
 أَجَدُّوا عَلَى ذِي شُونِي حُلُولًا
 ٣٠- بِأَنَّ قَوْمَكُمْ خُيِّرُوا خَصَلَتَيْنِ
 فَأَبْلَغَ أُمَائِلَ سَهْمٍ رَسُولًا
 ٣١- خِزْيُ الْحَيَاةِ وَحَزْبُ الصَّدِيقِ
 فِي كِلَاهُمَا جَعَلُوهَا عُذُولًا
 ٣٢- فَإِنْ لَمْ يَكُنْ غَيْرُ إِحْدَاهُمَا
 وَكُلُّ أَرَاهُ طَعَامًا وَبِيلَا
 ٣٣- وَلَا تَقْعُدُوا وَبِكُمْ مُنَّةٌ
 فَسِيرُوا إِلَى الْمَوْتِ سَيْرًا جَمِيلَا
 كَفَى بِالْحَوَادِثِ لِلْمَرْءِ غُولًا

- ۳۴- وَحُشُوا الْخُرُوبَ إِذَا أُوقِدَتْ رِمَاحًا طَوَالًا وَخَيْلًا فُحُولًا
 ۳۵- وَمِنْ نَسَجِ دَاوُودَ مَوْضُونَةً تَرَى لِلْقَوَاضِي فِيهَا صَلِيلًا
 ۳۶- فَإِنَّكُمْ وَعَطَاءُ الرِّهَانِ إِذَا جَرَّتِ الْحَرْبُ جُلًّا جَلِيلًا
 ۳۷- كَثُوبِ ابْنِ بَيْضٍ وَقَاهُمْ بِهِ فَسَدَّ عَلَى السَّالِكِينَ السَّبِيلَا

(X) 訳

- 1- お前はウマーマとは長い間、離れていた。はるかに離れていたため、お前は恋の重荷を背負わされた。
- 2- 彼女と遠く離れているにもかかわらず、夜になると、お前は彼女の幻に悩まされるが、得るものは少ない。
- 3- お前は恋に悩む悲哀を味わいながら、ラクダで旅する者達が通り過ぎていくと、彼方に見えなくなるまで見送った。
- 4- 彼女は我々のところにやってきて、何が悲しいのかと尋ねた。そこで、我々は、長の旅に出ると決めたのだ、と答えた。(君と会えなくなるのが悲しいのだ。)
- 5- 私は彼女に“あなたはご承知のとおり、私たちのキャラバンがこの地に留まって以来彼らにつれなかった。”と言った。
- 6- すると思いがけなく、彼女の両目から涙があふれ出て、ふっくらとした彼女の頬を流れ落ちた。
- 7- だが、彼女が私に与えてくれた甘い言葉は、顔をそむける空言以上のものではなかった。
- 8- すなわち、彼女の言い分によれば、男というものは毎日状況に応じて気分を変えるものだ、とのこと。
- 9- まるで、遠隔地にいる者は近くに来ることはなく、皮のテント²⁰⁾を張っている人たちのところにきて住むことはない、と(彼女は言っているかのようだ。)
- 10- そこで、私は野生のロバのように頑強で巨大な駿足の雌ラクダに鞍を乗せた。
- 11- このラクダは体ががっちり引き締まっていてカモシカが午睡するときも(疲れ知らずである)
- 12- 脂身で高く盛り上がったコブは、表面が滑らかで、鞍敷きが滑り落ちるほどである。
- 13- この雌ラクダは一年中、自由に草原で草を食み、奴隷が若いラクダを乳を飲ませるためにそばに寄せたりはしない²¹⁾。

20) qawm-a ʿadīm-in には2種の解釈ができる。ひとつは、「あるところに集まっている集団」つまり、ʿadīm をʿadama (限られた土地) の派生語と見なす。今ひとつは、ʿadīm を「赤い皮テント、転じて有力者らのテント」と解釈する。つまり部族の有力者のこと。

21) この雌ラクダは、不妊であることを示している。IX のムタンミムの詩では妊娠ラクダの強さが表現されているが、不妊ラクダはさらに強いとされる。アンタラのムアッラカ22行でも乳の出ないラクダが強いとされている。なお、一年中勝手に牧草を食べさせるとは、所有者が有力

- 14- あなたがこのラクダに乗ろうとして手綱を緩めるときも、横目でみていて、落ち着いており、(逃げようとしない)。
- 15- その目つきは、賭け矢ゲームの分配役が策を弄して、競技者を出し抜こうとするときの油断のならない目つきのようであった。
- 16- また、耳の両側から汗が流れ²²⁾、(ラクダの体の後部の) ふさふさと密集している毛の上に落ち、湿らしていた。
- 17- ラクダの胸は道のように広く、あなたはラクダが羽毛立つ羊毛の着物をまといていると思うであろう。
- 18- ラクダはクシュブを朝のうちに通り過ぎ、夕方にはアリークに達するほどの駿足であった²³⁾。
- 19- すなわち、ごつごつした丘の上を踏みつけて進んだが、まるで、強力無双の男が敗者を踏みつけているようであった。
- 20- ラクダがすばやく駆けて来るのを見ると、あなたは“灰色の雌ダチョウが(巢の卵が雨や霰に打たれるのを心配して) 急ぎ足で引き返す雄ダチョウに追いすがっているようだ”と思うだろう。
- 21- また、背を向けて立ち去るラクダの姿を見ると、あなたは“順風が帆を膨らませて急ぎ進む、荷を満載した船のようだ”と言うだろう。
- 22- その姿かたちを見れば目利きは誤ることなく、このラクダは貴種であると判断するであろう²⁴⁾。
- 23- 前の下肢はすいすいと動き、つれて上肢の筋肉が波打ち、後ろ足は前足に投げつけられるようにして、ラクダは前進する。
- 24- ラクダの円曲した肋骨は脊椎の淵に組み入れられ、胸部の強大な軟骨に結合している。
- 25- 私のこのラクダは部族が長い夜の旅に出かけるときには、すべての旅路で他のラクダの先頭に抜け出す。
- 26- 他のラクダが疲労のためふらついて旅路からはずれ、往来から離れないように努めているとき、このラクダは調子よく進む。その前足は、
- 27- 深みに落ちて瀕死に直面している泳ぎ手が水音を立ててもがいているときの両手のように活発に動いている。
- 28- 私が告げられたところによると、私の部族は —まだ彼らに会っていないのだが

者であることを表している。

- 22) 良く育ったラクダの耳は細長くともっていて雄カモシカの耳のたとえられる。タラハの *mu'allāqa* 34行及びアンタラの *mu'allāqa* 33-4行などが参考になる。
- 23) *Kushub* と *ʿArīk* の間は数日間行程と離れているが、このラクダは足が速く一日で走破したと言っている。*Kushub* は火山岩が生み出した高原でごつごつした岩が多く歩きにくいところである。アルハーリスの *mu'allāqa* 36行では *ḥarra rajlā* (馬やラクダから下りて、徒歩で歩く火山地) としている。
- 24) このラクダは歯を調べなくても、高貴さが一見してわかるの意。馬の年齢を知るためには、歯を調べる必要があるが、*ʿinna al-jawād-a ʿayn-u-hu furār-u-hu* という諺が言うように、目を見ただけですべてが分かる。詩人はラクダについて、これと同趣旨のことを述べている。

— ズー・シュワイスに住居を改めたとのことである。

- 29- 私が彼らのもとを訪ねる前に、もし死んだなら、サフム族の首脳らに使者をたてて伝えてくれ。
- 30- “あなたの一族は二者択一の選択に迫られている。そのいずれもが不正である²⁵⁾。”
- 31- すなわち、二者とは、屈辱の人生に甘んじるか、味方との戦争をするか、いずれを選ぶかである。私の見るところいずれも体に悪い食べ物である。
- 32- このいずれかしか選べないなら、堂々と進撃して戦死するがよい²⁶⁾。
- 33- あなた方に力がある限り座して待つな。時世の有為転変は必ず人の力を奪い死をもたらすであろう。
- 34- 一度戦争に火がつけばその炎を燃え上がらせよ。長い槍を構え、雄々しい種馬に乗って戦え。
- 35- また、ダビデの重ね織りの鎖帷子²⁷⁾で身を固めよ。あなたは乾いた音を立てて刀が振り下ろされるのをみるであろう。
- 36- 戦争が重大局面を迎えたときにあなた方と人質の提供は、
- 37- ビードの息子の衣の話に比すものだ。すなわち、彼らはそれでもって一族を守り、往来を旅する者達の道を塞いだのである²⁸⁾。

25) ‘adl (複数 ‘udūl) は「正義」と「不正」の両義があり、ここでは後者の意味。

26) 軽蔑され大死するのはさげよ、の意味

27) コーラン21:80、同34:10-11などに鎖帷子はダビデの考案によることがのべられているが、ジャーヒリーアのアラブにこの伝説がすでに伝えられていたことを物語る。ヒムヤル王家の Tubba’ が作ったとの伝説もある。

28) 36行と37行はそれまでと意味がつかない。詩人は戦うことを訴えているが、ここで突然、戦争を終焉させるためにアルフサイン・ブヌ・アルフマームが息子を人質に出した件にふれている。37行にでている、イブン・ビートは伝説上の民アードの裕福な商人であった。彼はルクマーン王の庇護のもとに取引をし、そのお礼として王に毎年衣類などの贈り物を献上していた。彼は死を迎える直前になって、王に財産を奪われるのが心配になり、息子に、「某国に行け、この国に留まってはならない。今年は王に衣装とラクダなどを贈らねばならぬ、お前は家族をつれ、財産を持って某国へ行け。その途中、これこれしかじかの隘路を通るだろう。その隘路の入口にルクマーン王への贈り物を置いておけ。王がそれを納めてくれれば、安全が買えたというものだ。だが、王がこれを納めずお前に悪事を働けば、神がそれに報いよう。」と言い含めた。息子は父の言うとおりにした。王はこれを知り後をつけたが、隘路の入口で贈り物を見つけると、これを納め引き返してしまった。ビートの衣が道を塞いだとは、この言い伝えにそったものの。

— (XI) アルムサイヤブ・ブヌ・アラス —

まえがき

この詩人は、Ḍubayʿa b. Rabīʿa 族の一員であるが、この部族についての詳しい情報は伝えられていない。しかし、彼が Qays b. Thaʿlabā 族の有名な詩人 Maymūn al-ʿAṣhā の母方の叔父であり、アルアアシャーがこの詩人の rāwī として多くのことを学んだとみられている。また、有名なタラファの母方の叔父アムル・タランミスはこの詩人と同族になるが、家系が異なる。アルムサッヤブは6世紀後半に活躍した詩人で、アルアアシャーと同様に有力者をたずねて旅をし、賞賛詩を捧げて褒賞に預かる生活をした、最も古い時代の賞賛詩人であった。

ここに訳した詩においては、彼は Dārim 系の Tamīm 族の族長 al-Qaʿqāʿ b. Maʿbad b. Zurāra を褒め称えている。この族長の父マアバドは Shʿīb Jabala の戦い (570年頃) より1, 2年前の Raḥraḥān の戦いにおけるタミーム族の指導者であったが、ʿĀmir b. Ṣaṣaʿa 族に捕えられた。その保釈交渉においてアーミル族は王の保釈条件に匹敵する1000頭以上のラクダを求めた。マアバドの兄弟 Laqīt は200頭しか渡せない、と答え交渉は行き詰まり、マアバドはとらえられたまま飢え死にした。詩人が褒めている息子のアルカアカーウは気前のよい人物であったため、Tayyār al-Furāt (ユーフラテスの流れ) というあだ名が付けられていた。以上はアルアンバーリーの注釈書によった。

この詩は kāmīl 調、26行で、1-6行がナスィーブ (愛の序詩)、7-14行がラクダの描写、15-16行が詩が広まることへの願い、17-26行が族長への賛辞となっている。

(XI) テキスト

وَقَالَ الْمُسَيَّبُ بْنُ عَلَسٍ

- | | |
|--|--|
| أَرْحَلْتُ مِنْ سَلَمَى بِغَيْرِ مَتَاعٍ | قَبْلَ الْخُطَّاسِ وَرُعْتَهَا بِوَدَاعٍ |
| مِنْ غَيْرِ مَقْلِيَةٍ وَإِنْ جَبَالَهَا | لَيْسَتْ بِأَرْمَامٍ وَلَا أَقْطَاعٍ |
| إِذْ تَسْتَبِيكَ بِأَصْلَتِي نَاعِمٍ | قَامَتْ لِتَفْتِنَهُ بِغَيْرِ قِنَاعٍ |
| وَمَهَا يَرْفُ كَأَنَّهُ إِذْ ذُقْتَهُ | عَانِيَةً شُجَّتْ بِمَاءِ يَرَاعٍ |
| أَوْ صَوْبُ غَادِيَةٍ أَدْرَتْهُ الصَّبَا | بِزَيْلِ أَرْهَرٍ مُدْمَجٍ بِسَبَاعٍ |
| فَرَأَيْتُ أَنَّ الْحُكْمَ مُجْتَنِبُ الصَّبَا | وَصَحَوْتُ بَعْدَ تَشَوُّقٍ وَرُوعٍ |
| فَتَسَلَّ حَاجَتَهَا إِذَا هِيَ أَغْرَضَتْ | بِخَمِيصَةٍ سُرْحِ الْيَدَيْنِ وَسَاعٍ |

- ۸- صَکَّاءَ ذِغْلَبَةٍ إِذَا اسْتَدْبَرْتَهَا
 ۹- وَكَأَنَّ قَنْطَرَةً بِمَوْضِعِ كُورِهَا
 ۱۰- وَإِذَا تَعَاوَرَتِ الْحَصَى أَخْفَأُهَا
 ۱۱- وَكَأَنَّ غَارِبَهَا رِبَاوَةٌ مَخْرِمٌ
 ۱۲- وَإِذَا أَطْفَتَ بِهَا أَطْفَتَ بِكُلِّكَلٍ
 ۱۳- مَرَحَتْ يَدَاهَا لِلنَّجَاءِ كَأَنَّمَا
 ۱۴- فَعَلَ السَّرِيعَةُ بَادَرَتْ جُدَادَهَا
 ۱۵- فَلَا تُهْدَيْنَ مَعَ الرِّيحِ قَصِيدَةٌ
 ۱۶- تَرِدُ الْمِيَاهَ فَمَا تَزَالُ غَرِيبَةً
 ۱۷- وَإِذَا الْمُلُوكُ تَدَافَعَتْ أَرْكَانُهَا
 ۱۸- وَإِذَا تَهَيَّجَ الرِّيحُ مِنْ صُرَادِهَا
 ۱۹- أَحَلَّتْ بَيْتَكَ بِالْجَمِيعِ وَبَعْضُهُمْ
 ۲۰- وَلَأَنْتَ أَجْوَدُ مِنْ خَلِيجٍ مُفْعَمٍ
 ۲۱- وَكَأَنَّ بُلُقَ الْخَيْلِ فِي حَافَاتِهِ
 ۲۲- وَلَأَنْتَ أَشْجَعُ فِي الْأَعَادَى كُلِّهَا
 ۲۳- يَأْتِي عَلَى الْقَوْمِ الْكَثِيرِ سِلَاحُهُمْ
 ۲۴- أَنْتَ الْوَفِيُّ فَمَا تُدْمُ وَبَعْضُهُمْ
 ۲۵- وَإِذَا رَمَاهُ الْكَاشِحُونَ رَمَاهُمْ
 ۲۶- وَلِذَاكُمْ زَعَمْتُ تَمِيمٌ أَنَّهُ
- حَرَجٍ إِذَا اسْتَقْبَلَتْهَا هِلَوَاعٍ
 مَلَسَاءُ بَيْنَ غَوَامِضِ الْأَنْسَاعِ
 دَوَى نَوَادِيهِ بِظَهْرِ الْقَاعِ
 وَتَمُدُّ ثَنَى جَدِيلِهَا بِشِرَاعِ
 نَبِضِ الْفَرَائِصِ مُجَفَّرِ الْأَضْلَاعِ
 تَكْرُو بِكَفِّي لَاعِبٍ فِي صَاعِ
 قَبْلَ الْمَسَاءِ تَهُمُّ بِالْإِسْرَاعِ
 مِنْى مُغْلَغَلَةً إِلَى الْقَعْقَاعِ
 فِي الْقَوْمِ بَيْنَ تَمَثُّلٍ وَسَمَاعِ
 أَفْضَلَتْ فَوْقَ أَكْفُهُمْ بِذِرَاعِ
 ثُلُجًا يُبِيخُ النَّيْبَ بِالْجَجْعَاعِ
 مُتَفَرِّقٍ لِيَحُلَّ بِالْأَوَزَاعِ
 مُتَرَاحِمٍ الْآدِي ذِي دُفْعَاعِ
 يَرْمِي بِهِنَّ ذَوَالِي الزُّرَاعِ
 مِنْ مُخْدِرٍ لَيْثٍ مُعِيدٍ وَقَاعِ
 فَيَهِيْتُ مِنْهُ الْقَوْمُ فِي وَعْوَاعِ
 تُودِي بِذِمَّتِهِ عُقَابُ مَلَاعِ
 بِمَعَابِلِ مَذْرُوبَةٍ وَقِطَاعِ
 أَهْلُ السَّمَاحَةِ وَالنَّدَى وَالْبَاعِ

(XI) 訳

- 1- 君はサルマーから何の楽しみごともしずからぬうちに、すなわち、(人々が吉凶の)くしゃみをするより早く、早朝旅立ち²⁹⁾、別れにあたり彼女を心配させたのか。
 2- 彼女に対して君は憎しみを抱いたわけでもないし、彼女が君をとらえている愛情の絆も擦り切れたり、断たれたりしていないにもかかわらず、(君は旅立ったの

29) 朝、人々が起きてくしゃみをするのを聞くのは凶運の兆しと受け取られていた。つまり、「嫌な目に会うより早く出立した」の意味。

か)。

- 3- と言うのは、彼女は美しい軟らかな頬で君を虜にするときには、ヴェールをはずして君を魅惑しようとして立つのだから³⁰⁾。
- 4- 水晶を思わず彼女の前歯はきらめいており、もし君がそれを味わえば、葦の茎を通して吸い上げた清水で割ったアーナ産³¹⁾のブドウ酒かと思うであろう。
- 5- あるいは、彼女の前歯は、東風による朝雲が降らせた雨水のようで³²⁾、それは土で栓をした銀色の水差しの中かで、澄んだブドウ酒と混ぜ合わされている。
- 6- とまれ、(私が彼女と別れるわけは)私の分別が若気を避けるようにと諭していると見たからだ。かくして私は恋に憧れ、激情にかられたあと、われに返ったのである。
- 7- 君が旅に出るのはいやだと言って彼女が顔をそむけるのであれば、彼女のことは忘れ、前足が軽やかで大股で歩む空腹の雌ラクダ³³⁾に乗って旅にでるがよい。
- 8- 背後からこのラクダを見れば、足の速い雌ダチョウのように後ろ足の両踝が接近しており、前から見れば、死者を運ぶ棺台のように、長大で駿足であることが分かる。
- 9- 鞍が置かれているところは石橋のようで³⁴⁾、腹帯のひもが食い込んでいる脇腹は滑らかで弾力がある。
- 10- ラクダが駆けるとき足で左右の石を蹴散らし、遠くへ飛ばされた石はくぼ地に落ちて音を響かせる³⁵⁾。
- 11- ラクダのこぶと首の間の肩甲骨は断崖の手前の丘のようで、首を伸ばしているため、手綱はゆるみなくぴーんと張っている。まるで船の帆柱が帆を張っているようだ³⁶⁾。
- 12- 君がラクダを良く観察しようとして巡回すると、まず腕の辺りにいたる。肩と肋骨の間の筋肉は激しく脈打ち、肋骨に囲まれた内部は大きな井戸のように広い。
- 13- ラクダの前足は早や駆けするに従い、活発に動き、まるで、平坦な地で球遊びをする者のすばやく動く手のようだ。
- 14- また、それは彼女が急いで布を織る姿に似ている³⁷⁾。すなわち、彼女は夕方までに、織物の糸を機織り機につぎ込み、作業を急ぎ終えようとしているのである。

30) 3人称の代名詞を用いているが、2人称、即ち詩人本人を表している。

31) 'Āna は al-Raqqa と Hit の中間にあったユーフラテス河畔の町でブドウの産地。

32) 東風は穏やかで雨の降り方も軟らかで地面の水がにごることもないとされていた。

33) khamīša は「空腹の雌ラクダ」と解説されているが、9-10行では太った大型のラクダのことを述べているように思える。

34) ラクダの盛り上がったこぶを qanṭara (石橋) にたとえるのは、Tarafa の mu'allāqa 22行に見られる。

35) al-qār とは、雨が降ってくぼ地にたまり乾いたところをさす。そこへ。蹴飛ばされた石が落ちて音を立てる。nawādin は遠く蹴飛ばされた石の破片。この一行はラクダが精力旺盛であることをのべたもの。

36) ラクダの首を帆柱に、手綱を帆に比している。

37) 彼女が機織り機のひもをすばやく往復させるさまを、ラクダの足の活発な動きになぞらえている。

- 15- かくして私は風に乗せてはるかなアルカアカーウ³⁸⁾のもとへ、私のカスィーダを必ずや届けるであろう。
- 16- このカスィーダは幾多の水場へと伝えられようが、常に新鮮で、人々の間で諺となり、また、好んで歌われるであろう。
- 17- 王らの宮殿で、有力者らが集い、優劣を論ずるとき、あなた（アルカアカーウ）は彼らより、一段勝っている³⁹⁾。
- 18- 寒風が吹きすさび冷たい雲から雪を降らすときには、忍耐強い老いた雌ラクダさえ、座所にうずくまるのを余儀なくされる。
- 19- アルカアカーウよ、一部の者たちが離れた辺鄙なところに住むとき、あなたはテントを部族の中心に建てた⁴⁰⁾。
- 20- まことにあなたは満々と水をたたえ、波が重なり互いに押し合い、岸边に当たる運河⁴¹⁾より、気前がよいお方だ。
- 21- まるで、運河の岸边にまだらの馬のような波がたち⁴²⁾、農夫に代わって水車に水を投げかけているようだ。
- 22- あなたはすべての敵に対して、藪の中を巢にして繰り返し猛襲するライオンよりも勇敢である。
- 23- 彼は武器を豊富に持ち、敵部族をものともせず攻め立てる。ために、彼らは恐れて騒がしく夜を過ごす。
- 24- あなたは非の打ち所のない誠実者だ。しかし、他の者は強奪する⁴³⁾ ワシが誓約の言葉を取り去るように保護の約束を破る。
- 25- 彼を憎む敵どもが彼⁴⁴⁾を射るときには、彼は先のとがった鋭利な矢じりや幅の広い矢じりで射返す。
- 26- このようであるから、タミーム族は彼こそは寛大にして、惜しみなく与えるこの上ない大度な人物だと主張するのである。

38) al-Qaṣqāṣ は前書きに登場している人物。「風にのせて」とは、「人々が次々に伝えて、めざす人のもとへ伝わる」の意味。

39) ʿarkān とあるのは王宮に集う族長や有力者をさす。「優劣を論ずる」とは王からの贈り物を求めていること。al-Qaṣqāṣ は族長であって王ではないが、誇張したもの。同じ主旨の王宮の集いの模様が、Labīd の *muʿallaqa* 70行に詠まれている。

40) 「物乞いや客のもてなしに使うテントを便利な場所にたてた」の意味。Ṭarafa の *muʿallaqa* 44行「私は(客や敵が来るのを)恐れて、山の上にわが身を隠すような男ではない。人々が助けを求めれば直ちに助ける」と同趣旨。

41) *khaliḥ* はチグリス河やユーフラテス河から引かれた運河のこと。タミーム族はこの近くに住んでいたのも、運河やこれらの大河になじんでいたと思われる。

42) *bulq al-khayl* (馬のまだら)とは「波」のこと。波が高まると水面が白くなり内部が青または黒く見えることから云われた表現。*ḍaliya* は「水車」と考えられるがその構造は不明。

43) *malāʿ* は、「横領、略奪」と解説されているが、山名かもしれない。

44) ここで、「彼」とは al-Qaṣqāṣ のことで人称がそれまでと変わっている。また矢は実際の矢とは限らず、相手の中傷する言葉を指しているかもしれない。

— (XII) アルフサイン・ブヌ・アルフマーム —

まえがき

この詩人は、Ghatafān 系の Dhubyān 族の有名な族長であった。彼はジャーヒリーヤ時代の末期に活躍した人物で、イスラーム時代にも生き長らえていた。『歌の書』(12: 128) にある彼の詩のひとつは敬神、神の啓示、最後の審判などへの言及があり、両時代にわたり活躍していたことを証拠づけている。もっとも、同時代の Zuhayr の *mu'allāqa* 27-8行と同様に完全にイスラーム化したものではなく、イスラーム的な感情を表現したものと考えられる。

詩人はマーニウ・アッダイム Mānī' al-Ḍaym (悪の防護者) というあだ名で呼ばれていた。彼の息子の一人がカリフ、ムアーウィヤを訪ねマーニウ・アッダイムの子と名乗ると、カリフはおおいに歓待し、訴えを聞き入れた、という逸話が伝えられている。

この詩が取り上げている事件は、Huraqa の戦いと呼ばれているもので、本詩集 VIII で一部言及したが以下に詳しく紹介する。詩人の作品は XV や XC でも取り上げられているが XC の詩は同じ事件を詠んだものである。

詩人の属する Murra 族には Sahm 家と Širma 家があった。前者は Qudā'a 系の Banū Ḥumays を庇護し連合していた。フマイス一門は弓術に優れ al-Huraqa の名で知られていた。他方シルマ家は同じくクダーア族の Banū Salamān を庇護していた。両者ともに庇護民と混住していた。シルマはブドウ酒を商う Taymā' 出のユダヤ人 Juhayn b. Ḥamal を庇護していた。また、サフムは Wādī al-Qurā のユダヤ人ブドウ酒商 Ḥusayn b. Ḥayy を庇護していた。他方、シルマは Abd al-ʿUzzā b. Ghatafān 族の Banū Jawshan 一族をも庇護していた。たまたま、この一族の Ḥuṣayn という男が行方不明になった。そこで彼の兄弟姉妹があらゆるキャラバンや集いでフサインを探し求めた。兄弟の一人がある日のことの酒屋によって酒を求めていると、姉妹の一人が行方不明者を捜しながら通りすぎた。すると、ジュファイナが云った。(この逸話は『歌の書』によっているが、ここで、ジュファイナとあるのは前後の関係からしてフサイン・ブヌ・ハイイの言と考えられる。)

تُسَائِلُ عَنْ أَخِيهَا كُلَّ رَكْبٍ وَعِنْدَ جُهَيْنَةَ الْخَبَرِ الْبَقِيْنُ

彼女は兄弟の行方を各キャラバンにたずねているが、ジュファイナが確かな情報をつかんでいる。

そこで、兄弟の一人が翌日ジュファイナを訪ねると、彼は何も知らない、と答えて次のように言った。

لَعَمْرُكَ مَا ضَلَّتْ ضَلَالٌ ابْنِ جَوْشَنٍ حَصَاةٌ بَلِيلٍ أَلْفَيْتُ وَسَطَ جَنْدَلٍ

あなたの命のかけて誓うが、暗闇の夜、石のなかに投げられた石より、ジャウシヤンの息子の行方はわからぬ。

つまり、闇の中で投げられた石を石塚の中で探すのは大変であるが見つかる可能性はある。しかし、行方不明になった兄弟を探すのは一層困難で不可能に近い、ということをはのめかしている。そこで、兄弟は引き返して、サフムの庇護民であるユダヤ人酒商フサイン・ブヌ・ハイイを殺した。サフム一門の指導者アルフサイン・ブヌ・アルフマーム(この詩の作者)は、早速、シルマの庇護民ジュファイナ(ユダヤ人酒商)を殺して復讐した。これに対してシルマ側はサフムの庇護民バヌー・サラマーンの男3人を殺すように命じた。ついで、彼はシルマに対して次のように提案した。“その方らは、わが庇護民であるユダヤ人を殺した。ゆえにわれ等はその復讐をした。するとその方はわれらが庇護するクダーアのバヌー・フマイスの男3人を殺した。よってわれ等はその方らの庇護下にあるクダーアのバヌー・サラマーンの男3人を殺した。今となつては、その方らの元にいるクダーアに出て行くように命じよ。われ等もわれらのもとにいるクダーアに出て行くように命じるであろう。われ等は兄弟であり、平和を保とうではないか。”

しかし、シルマはこれを受け入れず、臨戦態勢に入った。すると、かねてからサフムの略奪を企てていた Khaṣafa b. Qays b. ʿAylān 系の Muḥārib 族の al-Khudr 一門がシルマに味方した。この一門は Thaʿlaba b. Saʿd と連合していた。ガタファーン系のほとんどの部族はサフムの指導者アルフサイン・ブヌ・アルフマームがクダーアを庇護しなかったとして、シルマ陣営に加わった。サフム一族のうち、Udwān 家と ʿAbd ʿAmr (ʿAbd Ghāmm) 家は中立を保ち Wāthila 家(本詩集 X のバシャーマの一家)はサフム側に立った。サフム軍の主力をなしたのは庇護民バヌー・フマイス、すなわち弓の名手たち (Huraqa) であっただろう。両軍は Darāt Mawḍūʿ と言うところで戦いサフム軍が勝利した。この戦いは本詩集 X で言及したように、「Huraqa の戦い」と呼ばれている。この詩はこの戦いでの勝利を詠んだもので、ṭawīl 調、42行よりなる。

(XII) テキスト

وَقَالَ الْحَصِينُ بْنُ الْحُمَامِ الْمُرِّيُّ

- | | |
|--|--|
| ١- جَزَى اللَّهُ أَفْنَاءَ الْعَشِيرَةِ كُلِّهَا | بِدَارَةِ مَوْضُوعٍ عُفُوقًا وَمَأْتَمًا |
| ٢- بَنَى عَمَّنَا الْأَدْنَيْنِ مِنْهُمْ وَرَهْطَنَا | فَرَارَةً إِذْ رَامَتْ بِنَا الْحَرْبُ مُعْظَمًا |
| ٣- مَوَالِي مَوَالِينَا الْوِلَادَةَ مِنْهُمْ | وَمَوْلَى الْيَمِينِ حَابِسًا مُتَقَسِّمًا |
| ٤- وَلَمَّا رَأَيْتُ الْوُدَّ لَيْسَ بِنَافِعِي | وَأَنْ كَانَ يَوْمًا ذَا كَوَاكِبٍ مُظْلِمًا |
| ٥- صَبَرْنَا وَكَانَ الصَّبْرُ فِينَا سَجِيَّةً | بِأَسْيَافِنَا يَقْطَعْنَ كَفًّا وَمِعْصَمًا |
| ٦- يُفْلَقْنَ هَامًا مِنْ رِجَالٍ أَعَزَّةٍ | عَلَيْنَا وَهُمْ كَانُوا أَعَقَّ وَأَظْلَمًا |

- ٧- وَجُوهٌ عَدُوٌّ وَالصُّدُورُ حَدِيثَةٌ
 ٨- فَلَيْتَ أَبَا شَيْبَلٍ رَأَى كَرَّ خَيْلِنَا
 ٩- نُطَارِدُهُمْ نَسْتَنْقِذُ الْجُرَدَ كَالْقَنَا
 ١٠- عَشِيَّةَ لَا تُغْنِي الرِّمَاحُ مَكَانَهَا
 ١١- لَدُنْ غُدُوَّةٍ حَتَّى أَتَى اللَّيْلُ مَا تَرَى
 ١٢- وَأَجْرَدَ كَالسَّرْحَانِ يَضْرِبُهُ النَّدَى
 ١٣- يَطَّانَ مِنَ الْقَتْلَى وَمِنْ قِصْدِ الْقَنَا
 ١٤- عَلَيْهِنَّ فِتْيَانٌ كَسَاهُمْ مُحَرَّقُ
 ١٥- صَفَائِحَ بُصْرَى أَخْلَصَتْهَا قُيُوثُهَا
 ١٦- يَهْزُونَ سُمْرًا مِنْ رِمَاحِ رُدَيْنَةٍ
 ١٧- أَثْغَلَبَ لَوْ كُنْتُمْ مَوَالِي مِثْلَهَا
 ١٨- وَلَوْ لَا رِجَالٌ مِنْ رِزَامِ بْنِ مَازِنٍ
 ١٩- لَأَقْسَمْتُ لَا تَنْفُكُ مِنِّي مُحَارِبٌ
 ٢٠- وَحَتَّى يَرَوْا قَوْمًا تَضِبُّ لِثَائِهِمْ
 ٢١- وَلَا غَرَزَ إِلَّا الْخَضِرُ خَضِرُ مُحَارِبٍ
 ٢٢- وَجَاءَتْ جِحَاشٌ قَضَّهَا بِقَضِيبِهَا
 ٢٣- وَهَارِبَةُ الْبُقْعَاءِ أَصْبَحَ جَمْعُهَا
 ٢٤- بِمُعْتَرِكِ ضَنْكٍ بِهِ قِصْدُ الْقَنَا
 ٢٥- وَقُلْتُ لَهُمْ يَا آلَ ذُبْيَانَ مَا لَكُمْ
 ٢٦- أَمَا تَعْلَمُونَ الْيَوْمَ حِلْفَ عُرَيْنَةٍ
 ٢٧- وَأُبْلِغَ أُنَيْسًا سَيِّدَ الْحَيِّ أَنَّهُ
 ٢٨- فَإِنَّكَ لَوْ فَارَقْتَنَا قَبْلَ هَذِهِ
 ٢٩- وَأُبْلِغَ تَلِيدًا إِنْ عَرَضَتْ أَبْنُ مَالِكٍ
 ٣٠- فَإِنْ كُنْتَ عَنْ أَخْلَاقِ قَوْمِكَ رَاغِبًا
 ٣١- أَقِيمِي إِلَيْكَ عَبْدَ عَمْرٍو وَشَايِعِي
 بِؤُودٌ فَأَوْدَى كُلُّ وُدٍّ فَأَنْعَمَا
 وَخَيْلُهُمْ بَيْنَ السَّتَارِ فَأَظْلَمَا
 وَيَسْتَنْقِذُونَ السَّمْهَرَى الْمُقْوَمَا
 وَلَا النَّبْلُ إِلَّا الْمُشْرِفَى الْمُصَمَّمَا
 مِنَ الْخَيْلِ إِلَّا خَارِجِيًّا مُسَوَّمَا
 وَمَحْبُوكَةً كَالسَّيِّدِ شَقَاءَ صِلْدَمَا
 خَبَارًا فَمَا يَجْرِينِ إِلَّا تَجَشُّمًا
 وَكَانَ إِذَا يَكْسُو أَجَادَ وَأَكْرَمَا
 وَمُطَرِّدًا مِنْ نَسِجِ ذَاوُودَ مُبْهَمَا
 إِذَا حُرُكَتْ بَضَّتْ عَوَامِلُهَا دَمًا
 إِذَا لَمَنَعْنَا حَوْضَكُمْ أَنْ يُهْدَمَا
 وَآلِ سُبَيْعٍ أَوْ أَسْوَعَكَ عَلَقَمَا
 عَلَى آلِهِ حَدْبَاءٌ حَتَّى تَنْدَمَا
 يَهْزُونَ أَرْمَاحًا وَجَيْشًا عَزَمَرَمَا
 يُمَشُّونَ حَوْلِي حَاسِرًا وَمُلَاقَمَا
 وَجَمْعُ غُوَالٍ مَا أَدَقُّ وَالْأَمَا
 أَمَامَ جُمُوعِ النَّاسِ جَمْعًا مُقَدَّمَا
 صَبْرَنَا لَهُ قَدْ بَلَ أَفْرَاسَنَا دَمًا
 تَفَاقَدْتُمْ لَا تُقَدِّمُونَ مُقَدَّمَا
 وَحِلْفًا بِصَحْرَاءِ الشُّطُونِ وَمُقَسَّمَا
 يَسُوسُ أُمُورًا غَيْرُهَا كَانَ أَحْزَمَا
 إِذَا لَبَعْنَا فَوْقَ قَبْرِكَ مَاتَمَا
 وَهَلْ يَنْفَعَنَّ الْعِلْمُ إِلَّا الْمُعَلَّمَا
 فَعُدْ بِضُبَيْعٍ أَوْ بِعُوفٍ بِنِ أَصْرَمَا
 عَلَى كُلِّ مَاءٍ وَسَطٌ ذُبْيَانٌ خِيَمَا

- 32- وَعُوذِي بِأَفْنَاءِ الْعَشِيرَةِ إِنَّمَا
 33- جَزَى اللَّهُ عَنَّا عَبْدَ عَمْرِو مَلَامَةً
 34- وَحَيَّ مَنَافٍ قَدْ رَأَيْنَا مَكَانَهُمْ
 35- وَآلَ لَقِيْطٍ إِنِّي لَنَ أَسْوَأَهُمْ
 36- وَقَالُوا تَبَيَّنَ هَلْ تَرَى بَيْنَ ضَارِحٍ
 37- فَالْحَقْنَ أَقْوَامًا لِنَامَا بِأَصْلِهِمْ
 38- وَأَنْجَيْنَ مَنْ أَبْقَيْنَ مِنَّا بِخُطَّةٍ
 39- أَبِي لَابِنٍ سَلِمَى أَنَّهُ غَيْرُ خَالِدٍ
 40- فَلَسْتُ بِمُبْتَاعِ الْحَيَاةِ بِسُبَّةٍ
 41- وَلَكِنْ خُذُونِي أَيَّ يَوْمٍ قَدَرْتُمْ
 42- بَيَّةَ أَنِّي قَدْ فَجَعْتُ بِفَارِسٍ
- يَعُوذُ الذَّلِيلُ بِالْعَزِيزِ لِيُعْصَمَا
 وَعُدْوَانَ سَهْمٍ مَا أَدَقَّ وَالْأَمَا
 وَقُرَّانَ إِذْ أَجْرَى إِلَيْنَا وَالْجَمَا
 إِذَا لَكَسَوْتُ الْعَمَّ بُرْدًا مُسَهَّمَا
 وَنَهَى أَكْفً صَارِحًا غَيْرَ أَعْجَمَا
 وَشَيْدَنَ أَحْسَابًا وَفَاجَانُ مَعْنَمَا
 مِنَ الْعُدْرِ لَمْ يَدْنَسْ وَإِنْ كَانَ مُؤَلَّمَا
 مُلَاقَى الْمَنَايَا أَيَّ صَرْفٍ تَيَمَّمَا
 وَلَا مُبْتَغٍ مِنْ رَهْبَةِ الْمَوْتِ سَلَّمَا
 عَلَى فَحُزُّوا الرَّأْسَ أَنْ أَتَكَلَّمَا
 إِذَا عَرَدَ الْأَقْوَامُ أَقْدَمَ مُعْلِمَا

(XII) 訳

- 1- 出自不明の混成部族全員に⁴⁵⁾、ダーラト・マウドーウにおける不服従と罪業に対して神の報復があらんことを願う。
- 2- 彼らはわれらの父方の叔父のせがれたちで、その中でもわれらに最も近い血縁者である。即ちわれらの一族ファザーラだ⁴⁶⁾。
- 3- 彼らは生まれはわれらと同じ血筋の従兄弟の従兄弟か、または、誓いによる従兄弟であるが、われらに敵対し、誓いあって対抗している⁴⁷⁾。
- 4- 私は友情を表してやったが無益であると見たとき、それは戦塵により昼間が夜のように暗くなり、惑星が見えた日であった⁴⁸⁾。
- 5- われらは手のひらや手首を切り離す刀を持ちながら、耐えていた。忍耐はわれらの天性である。
- 6- 彼らはわれわれが親しくしていた人々の頭を切り裂いた。彼らはかねてより、著しく不誠実で、また悪行を重ねるやからではあったが。
- 7- 敵の顔をまえにして、われらの胸の中に最近まで留まっていた友情は、今や消え

45) 「出自不明の混成部族」は侮辱的表現。

46) Fazāra は *Dhubyān* の支族、その族長 *Hudhayfa b. Badr* はアブス族とのダーヒスの戦いの原因を造った凶悪な人物。詩人の時代には族長は *Urayna b. Hishn* が継いでおり、詩人の名声を妬み敵意を抱いていた。*rām-at* の主語は *al-ḥarb* (戦争)

47) この一行は文の構造が難解である。*hābis-an mutaqassam-ā* を *mawlā* の *hāl* とみなした。

48) 激しい戦闘などに見舞われた日に、土埃が舞い上がり、昼間が暗くなって星が見えた、というのは常套的表現。

失せ死に絶えた。

- 8- アブー・シブル⁴⁹⁾ がアッシタールとアズラムのあいだでわれらの軍馬と彼らの軍馬の逆襲戦を見ておればよかったのに。
- 9- われ等は彼らを撃退し、槍のような毛の短い馬を（戦利品として）うばった。彼らは真っ直ぐな槍を手に入れた。（体にわれらの槍を突き刺されたままであった。）⁵⁰⁾
- 10- 戦闘が激化して、槍も矢も役立たなくなった夕刻になると、骨をも貫くマシュラフ産⁵¹⁾ の剣に頼るほかはなかった。
- 11- 早朝から夜になるまで、（戦場で）あなたに見えるのは標識をつけた勇ましい騎士だけであった⁵²⁾。
- 12- すなわち、夜露にうたれて、生気みなぎるオオカミのような短毛の軍馬と雌オオカミのように毛が強くよりあった長大で岩のように頑強な雌馬（に乗った騎士）だけであった。
- 13- これらの軍馬は多くの屍と折れた槍をふみつけるが、まるで、（ぬかるみのような）軟らかな地面を駆け抜けるので、困難を極めた。
- 14- 軍馬にはムハッリク⁵³⁾ が纏わせた鎧で身を固めた戦士が乗っている。ムハッリクはこの上なく見事な鎧を纏わせている。
- 15- また、あなたは鍛冶屋が傷ひとつないように磨き上げたブスラー産⁵⁴⁾ の幅の広い刀身とダビデ織りの抜け目ない完全な鎧を見るだろう。
- 16- 彼らはルダイナ⁵⁵⁾ ゆかりの褐色の槍をしごく。槍がしごかれると穂先から血がしたり落ちる。
- 17- サアラバ族よ、この戦いにおいてそちらがわれらの味方であったなら、われらはそちらの水槽が壊されるのを防いでやっただろうに⁵⁶⁾。
- 18- リザーム・ブヌ・マージン⁵⁷⁾ とスパイウー門の男たち（のようにサフム攻撃に加わらなかった者が）いなかったら、アルカマーよ、私は貴様に危害を加えてい

49) 'Abū Shibl は Mulayt b. Ka'b al-Murri のことで、おそらく詩人の親類であろう。

50) 後半を直訳すると、「かれらは真っ直ぐな槍を手に入れた」となるが、「槍に突き刺されたままであった」の意味。

51) al-mashrafi : al-Rif 近くの al-Mashārif という村の産、または Thaqif 族の Mashraf という男が作った剣。

52) kharijī : 血統によらず自身すぐれた馬またはその騎士。musawwi(a)m : 標識をつけた騎士。この一行は戦場には勇者しか残っていなかったことを述べている。

53) Muharriq : ラフム朝の王、時にアムル・ブヌ・ヒンド王 [554-69] をさす。ダビデやヒムヤルの王と同様に優れた鎖帷子の製作者だったとの伝説による。

54) Buṣṣā はハウラーンよりもっと南部にあった村のことであろう。

55) Rudayna は al-Bahrayn の al-Khatt の女性でインドから輸入される竹を売っていた。この竹が槍の柄の材料に用いられた。褐色とは絵の竹が青竹ではなく良く熟した竹を表す。

56) Thalaba はズバーン系の一族だが詩人の一族とは先祖が枝分かれしている。水槽を壊すとは「災難に会う」の意味。Zuhayr の *mu'allāqa* 53行には、「水槽を守らぬ者は、敵にそれを壊される」とある。

57) 原文では、Rizām b. Mālik となっているが、正しくは Rizām b. Māzin。17行のサアラバ家の者でリザームとスパイウ家だけは詩人のサフム軍攻撃に加わらなかった。その他のサアラバの縁者らは攻撃に加担し、'Alqamā は攻撃に参加したサアラバ一族の長であった。

たかも知れぬ。

- 19- 私は誓って言うが、ムハーリブ⁵⁸⁾が、悔い改めるまで、困難な境遇に置きつづけるであろう。
- 20- 即ち、彼らは敵を打倒しようと、齒茎から泡を飛ばしながら攻め寄せ、槍を振り回す戦士や多数の軍勢を目の当たりにするであろう。
- 21- 驚き入ったのは黒人たちである。すなわち、ムハーリブの黒人たちである⁵⁹⁾。彼らは私の周りがある者は胄もかぶらず、ある者は鎧をまとって歩かされていたことである。
- 22- ジハーシュ族⁶⁰⁾の老若全員が寄せてきた。加えてウワールの群衆も加わったが、なんと貧弱で卑しい者どもであることよ。
- 23- まだらのハーリバ族⁶¹⁾もやってきた。その軍勢は（勇敢なことで知られていたため）最前列に並んだ⁶²⁾。
- 24- 狭い戦場には折れた槍が散乱し、われらは戦闘に耐えたが、軍馬は血潮にぬれた。
- 25- そこで私は彼らに言った。“ズブヤーン家の者たちよ、お前たちは互いに仲間を失い、滅んでしまえ。何故勇敢に戦列の前に進み出ないのか。
- 26- お前たちは今日、ウライナの盟約⁶³⁾とアッシャトウーン砂漠での盟約と誓いの場所を知らないのか。
- 27- （戦列を離れて様子見していたムッラ）族の長、小童のアナスに伝えよ、貴様

58) Muḥārib は冒頭に説明したようにシルマに味方した。

59) Muḥārib は黒人集団であったため *khudr* (ʾaḥḍar “緑色” の複数) と呼ばれていたのであろう。

60) Jihāsh, ʿUwāl とともにサアラバー門。

61) 「まだらのハーリバ族」とは、彼らが乗っている馬が白や黒で全体としてまだら模様に見えるからであろう。

62) マルズキーの校訂本には23行と24行の間に次の一行が入っている。

مَوَالِي مَوَالِينَا لِيَسْبُوا نِسَاءَنَا
لَعَمْرِي لَقَدْ جِئْتُمْ بِسِنَةِ أَشْأَمَا

(われらのいとこのいとこよ、彼らにわれの女たちを捕えさせてみよ。まことにお前たちは凶運の慣わしを携えてきたのだぞ。)

ズハイルの *muʿallaqa* 32行、“戦争はあなた方に凶運の子を産む”と良く似た表現。すなわち、同じズブヤーン一族の中で、サフムとシルマ両家が争うと災難をまねくぞ、とハーリバを脅迫したもの。

63) *hilf ʿUrayna* (ウライナの盟約) についてはアルアンバーリーは *Bajīla* 族の歴史とともに詳細の解説しているが要約すると以下のとおり。バジーラ族の一支族 *Qasr b. ʿAbqar* はアルヤマンの北部に住んでいた。ある日この一族の *ʿUrayna b. Naḍīr* なる者がトビが飛んでいるのを見て“わたしがこのトビの庇護者になる”と叫んだ。それより後そのトビには、彼の名にちなんで *al-ʿUrānī* という名が付けられた。ところがある日、そのトビが殺されていて、死骸に *ʿAfsā b. Naḍhīr b. Qasr* 家のある男の矢が刺さっていた。そこでウライナ家の男たちはその男を殺して復讐した。これがもとで、ウライナ、アフサー両家の戦いが始まり後者はほとんどの者が殺された。前者はカスルー門から追放された。ここで盟約としているのはトビを庇護すると言い渡したことをさす。同様にサフム家がフラカを庇護した盟約は *hilfa Ḥuraqa* と言われた。詩人は過去の事例を取り上げて、同じズブヤーン家のサフム、シルマ両家が争えば、悲惨な結果を招く、と警告したものである。なお、アッシャトウーンの砂漠の盟約には言及されていない。おそらくズブヤーン領域のことであろう。

- は諸事を治めているが、煮えきらぬところがある”と。
- 28- このような事態になる前に、貴様が死んでいたのなら、われ等は貴様の墓の上に哀悼の使者を送ってやったのだが。(今となつては貴様が死んでも泣いてやらぬ)。
- 29- 貴様が偶然マーリクのせがれタリード⁶⁴⁾に会うようなことがあれば私の言葉を伝えよ。一体、学ぶ態度を持たない者に知識を授けても有益か、と。
- 30- (タリードよ) 貴様が貴様の一族の気質を好まないのであれば、ドバイウかアウフ・ブヌ・アスラム⁶⁵⁾を頼って身を寄せるがよい。
- 31- 貴様のもとアブド・アムル⁶⁶⁾の兵らを待機させ、テントが建てられているズバーン族の各水場に集結するがよい。
- 32- 出自不明の混成部族のもとに避難するがよい。惨めな者は保護を求めて強者のもとに身を寄せるものである。
- 33- 神がわれらに代わってアブド・アムルに報復し、ウドワーン・サフム⁶⁷⁾を非難されるように願う。彼らはなんと軟弱で卑しい者どもであることよ。
- 34- マナーフとクッラーン⁶⁸⁾にも神の報復があらんことを。前者の態度は良く見定めた。後者は軍馬を駆ってわれらと戦うために押し寄せてきた。
- 35- ラキート一家⁶⁹⁾にも同じ報いあれ。私は彼らに決して危害を加えない。(だが、敵方につくなら) 彼らに人目に目立つ縞模様の屈辱の外衣を着せてやろう。
- 36- そして、彼らは言った。“良く承知せよ、お前たちはダーリジュとアクッフの池のあいだで口の利けない者は別として、助けを求めて叫んでいるものが見えるか。”⁷⁰⁾
- 37- われらの騎士は出自愚劣な者どもに追いつがって敗走させ、自らの名声を高め、やすやすと戦利品を得た。
- 38- 彼らは、戦闘で生き残った味方を救い、苦闘に耐え、逃亡せず名誉を汚さなかった。
- 39- サルマーの子(詩人本人)⁷¹⁾は永遠に生きる者ではないし、いずれ、運命の赴くまま死ぬ身であるが、(命ある限り) 屈辱を加えられることは、断固拒絶する。
- 40- 即ち、私は屈辱でもって人生を買い求める男ではない。また、死を恐れて梯子を求める⁷²⁾ような者でもない。

64) Talid 何者かは不明。

65) Dubay', 'Awf b. 'Aşram 両名ともに説明なく何者か不明。

66) 'Abd 'Amr はサフム家の一族であるが、シルマ側についた。

67) 'Udwān もサフム家の一族であるが、シルマに味方した。31行と同じく一門のうち敵に味方した者を非難している。

68) Manāf, Qurṛān 両部族もどのような血縁なのかは不明。

69) Laqīṭ も不明の一族であるが、敵方につくなら恥をかかせるとおどしている所から見て、詩人の縁者かも知れぬ。

70) この一行は前後との関係があいまいで、脱落した行があるのかもしれない。

71) 詩人の母の名は Salmā

72) これとよく似た表現がズバイルの *mu'allāqa* 49行にある。「槍の穂先にさらされる者は、穂先が必ずこれを捕らえる。たとえ梯子段を登って天に逃れようとも。」

- 41- されば、何時の日か、私に手出しできるようになれば、私を捕え、この首を切るがよい。
- 42- というのは、他の者どもが退却しているときに、勇者の標識をつけた騎士が大胆にも向かってきたが、私は彼を刺し殺し、(お前たちに損害を与え、復讐されるだけのことをしているからだ)。

— (XIII) アブド・アルカイスの男 —

まえがき

注釈者によると、詩人の名は不明で、今日、al-ʿAḥsā または al-Ḥasā と呼ばれているバハレーンの南方海岸によった部族員であったとしている。彼の部族は Bakr b. Wā'il 系の Banū Shaybān と同盟していた。また、別の所伝では、詩人は、多分、Murra 族の Yazīd b. Sinān b. ʿAbī Ḥāritha で、アルヤマンから北アラビアのシリヤ国境辺に移住した Bal-Qayn (Banū al-Qayn) との戦いの後この詩を詠んだとなっている。詩の内容から分かるとおり、戦闘は Dhāt al-Rimth という所で行われた。相手は ʿAbū Ṣakhr b. ʿAmr。イスラーム直前の作とされ、wāfir 調、わずか8行の詩である。

(XIII) テキスト

وَقَالَ رَجُلٌ مِّنْ عَبْدِ الْقَيْسِ حَلِيفٌ لِّبَنِي شَيْبَانَ

- | | |
|--|--|
| عَرَفْتُ شَنَاءَتِي فِيهِمْ وَوَثَرِي | ١- لَمَّا أَنْ رَأَيْتُ بَنِي حُيَيٍّ |
| لِيَرْمُوا نَحْرَهَا كَتَبًا وَنَحْرِي | ٢- رَمَيْتُهُمْ بِوَجْرَةٍ إِذْ تَوَاصَوْا |
| كَأَنَّ فُلُوقَهَا فِيهِمْ وَبِكْرِي | ٣- إِذَا نَفَذْتُهُمْ كَرَّتْ عَلَيْهِمْ |
| كَأَنَّ ظُبَاتَهَا لَهَا نَجْمٌ | ٤- بِذَاتِ الرِّمْتِ إِذْ خَفَضُوا الْعَوَالِي |
| يَمُمْتُ بِهَا أَبَا صَخْرٍ بَنَ عَمْرٍو | ٥- فَلَمْ أَتَكَلَّ وَلَمْ أَجِبْ وَلَكِنْ |
| بِنَافِذَةٍ عَلَى دَهَشٍ وَذُعْرِ | ٦- شَكَاكَتِ مَجَامِعِ الْأَوْصَالِ مِنْهُ |
| كَأَنَّ سِنَانَهُ خُرْطُومُ نَسْرِ | ٧- تَرَكْتُ الرُّمَحَ يَبْرُقُ فِي صَلَاةِ |
| وَإِنْ يَهْلِكُ فَذَلِكَ كَانَ قَدْرِي | ٨- فَإِنْ يَبْرَأْ فَلَمْ أَنْفِثْ عَلَيْهِ |

(XIII) 訳

- 1- 私はファイイー門を見たとき、彼らに対して憎しみと復讐の念を覚えた。
- 2- 彼等が互いに、(私の愛馬)ワジュラと⁷³⁾わたしののどの近くを射よ、と叫び交わっていたのでわたしはワジュラを駆って彼らを射た。
- 3- 私が彼らを蹴散らして通りすぎると、ワジュラは反撃に移ったが、まるで、彼らのなかに自らの子馬と私の初児を求めようとしているかのように激しいものであ

73) Wajra は詩人の馬の名前。

った。

- 4- ザート・アッリムス⁷⁴⁾の地で、かれらが槍の穂先を下げて（われらを迎え撃とうとしたときの）穂先は炭火の炎のようであった。
- 5- だが、私はひるむことなく、臆することなく、アブー・サフル・ブヌ・アムルに愛馬を駆って狙い定めた。
- 6- 私は一撃でもって彼の鎧の継ぎ目を刺し貫いたが、（きわめて危険な状況のもとであったので）驚愕と恐怖の念をまぬがれなかった。
- 7- 私は彼の背中を貫いた槍の穂先がきらめくままにしておいた。それは、まるでハゲワシのくちばしのようにであった。
- 8- もし快復すれば、彼に呪文をかけなかったからだ⁷⁵⁾。（彼の快復力によるものである）だが、もし死ねば、私の力によるもので、（望むところだ）。

74) まえがきであげた戦いの場所ザート・アッリムスは「タマリスクが生えている土地」の意味であるがどこか不明。また、戦いの相手アブー・サフル・ブヌ・アムルも何者かわからない。この地での戦いは *ʿAyyām al-ʿArab* の中にも見当たらない。この詩の作者を Yazīd b. Sinān b. ʿAbī al-Hāritha とすると、彼はズハイル・ブヌ・アビー・スルマーが褒め称えたハリム・ブヌ・シナーンと兄弟であり、イスラーム直前の作となる。ヤジード作の説はイブン・アルカルビーの *Kitāb al-Khayl* (馬の書)に、2行目が彼の作として載っていることによっている。

75) *fa-lam ʿa-nfīth ʿalay-hi* : 私は彼に息を吹きかけていない(私は彼に呪文をかけていない)。結び目に息やつばを吹きかけるのは、ジャーヒリーヤ時代のアラブの魔術の慣行であった。コーラン 113 : 4には、*min sharr-i n-naḥāṭ-i fī l-ʿuqad-i* (結び目に息を吹きかける老婆の悪から)とある。

— (XIV) アルマッラール・ブヌ・ムンキズ —

まえがき

この詩人の作品は本詩集 XVI にも載せられている。彼はイスラーム初期の詩人で Jarīr と同時代に活躍した。彼の一派は Bal ʿAdwīya (Banū al-ʿAdwīya) と呼ばれている。彼らはタミーム系の Mālik b. Ḥaṇẓala b. Mālik b. Zayd Manāt の子孫にあたる。マールクには11人の息子がいたが、うち4人の母 al-Ḥarām の祖先に ʿAdī という名の人物がおり、その名にちなんで彼らはバル・アダウィーヤ（アディーの息子たち）と呼ばれるようになった。この詩の4行には万物の主である神、などとの表現があり、イスラーム色を帯びていることが分かる。まず、ある婦人が家畜を少ししか所有していない、として男を責めたのに対して、その男が彼女に反論するところから詠まれたユニークな詩となっている。すなわち、4-12行で、ラクダを多く所有している者達は吝嗇である、我々のもとにはナツメヤシの園があり、地下水を吸っている、地表の草に依存しているラクダは渇きで死ぬが、地下深くの水を吸っているナツメヤシの木は、そのような目にはあわあない、などと言いつつ返している。wāfir 調、12行（元々は16行であったらしい）。

(XIV) テキスト

قَالَ الْمَرَارُ بْنُ مُنْقِذٍ

- | | | |
|---|---|-----|
| يُعَلِّكُ هَجْمَةً حُمْرًا وَجُونَا | وَكَايْنٍ مِنْ فَتَى سَوْءٍ تَرْبِهِ | -1 |
| وَيَتْرُكُهَا لِقَوْمٍ آخِرِينَا | يَضُنُّ بِحَقِّهَا وَيُذَمُّ فِيهَا | -2 |
| وَنُصْبِحُ لَا تَرَيْنَ لَنَا لُبُونَا | فَإِنَّكَ إِنْ تَرَى إِلَّا سَوَانَا | -3 |
| عَطَاءَ اللَّهِ رَبِّ الْعَالَمِينَا | فَإِنَّ لَنَا حَظَائِرَ نَاعِمَاتٍ | -4 |
| شَرِبْنَا جِمَامَهُ حَتَّى رَوِينَا | طَلَبْنَا الْبَحْرَ بِالْأَذْنَابِ حَتَّى | -5 |
| بَوَائِكَ مَا يُبَالِيَنَّ السَّيْنَا | تُطَاوِلُ مَخْرِمِي صُدُذَى أَشَى | -6 |
| جَوَارٍ بِالذَّوَائِبِ يَنْتَصِينَا | كَأَنَّ فُرُوعَهَا فِي كُلِّ رِيحٍ | -7 |
| إِذَا لَمْ تَبْقَ سَائِمَةٌ بَقِينَا | بَنَاتُ الدَّهْرِ لَا يَحْفَلْنَ مَحَلًّا | -8 |
| خَرَجْنَا وَمَا عَجَفْنَا مِنَ السَّيْنَا | إِذَا كَانَ السَّنُونَ مُجَلِّحَاتٍ | -9 |
| مَحَلًّا مُكْرَمًا حَتَّى يَبِينَا | يَسِيرُ الضَّيْفُ ثُمَّ يَحُلُّ فِيهَا | -10 |

- ١١- فَيْلُكَ لَنَا غَنًى وَالْأَجْرُ بَاقٍ فَعُضِّي بَعْضَ لَوْمِكَ يَا طَعِينَا
 ١٢- بَنَاتُ بَنَاتِهَا وَبَنَاتُ أُخْرَى صَوَادٍ مَا صَدِينِ وَقَدْ رَوِينَا
 (١٣)- غَدَتْ أُمُّ الْخُنَابِسِ أَيْ عَصْرِ تُعَاتِبُنَا فَقُلْتُ لَهَا ذَرِينَا
 (١٤)- رَأْتُ لِي صِرْمَةً لَا شَرَحَ فِيهَا أَقَاسِمُهَا الْمَسَائِلَ وَالذُّيُونَا
 (١٥)- تَخَرَّمَهَا الْعَطَاءُ فَكُلَّ يَوْمٍ يُجَاذِبُ رَاكِبٌ مِنْهَا قَرِينَا
 (١٦)- وَكَأَنَّ قَدْ رَأَيْنَا مِنْ بَخِيلٍ يُعَلِّكُ هَجْمَةً سُودًا وَجُونَا

(XIV) 訳

- 1- 貴女はなんと多くの悪い男たちを見られたことか。赤や黒のラクダ百頭にしがみついた男たちを。
- 2- そのような男は自分のラクダを当然支払うべき債務に当てるのを惜しみ⁷⁶⁾、人々に非難されているが、他人に遺産を残すのがおちであろう。
- 3- 貴女がもし私たち以外の者はラクダを所有しており、私たちは一頭の乳ラクダも持ち合わせが無くなったと見たところで（何の不都合があるのか）。
- 4- 何故なら、私たちは（ラクダを手放した代わりに）囲いがあるナツメヤシの果樹園をもっているからである。これこそ万物の主なる神の贈り物である。
- 5- ナツメヤシの樹は多量の水を根に求めるが、満足するまでこれを飲んでいる。
- 6- ナツメヤシの樹は、切り立って向かい合うウシャイイ溪谷⁷⁷⁾の両面に聳えている頂上と競い合うように高々と伸びていて、実り豊かで、早魃の年を意に介さない。
- 7- ナツメヤシの樹の上のほうの枝は風が吹くたびに前髪をつかみ合う娘たちのようである⁷⁸⁾。
- 8- ナツメヤシの樹は、時世が転変して早魃に見舞われても苦しむことはなく、草を食べるラクダの群れが渇きのために死に絶えても、生き残る。
- 9- 早魃の年、地表の草木がすべて枯れても、ナツメヤシの樹は地面に突出し、渇き

76) ya-dann-u bi-ḥaqq-i-hā : コーラン81 : 24に、wa-mā huwa ‘alā al-ghayb-i bi-dānīn-in（彼は、見えないものについて知っていることを出し惜しみするような男ではない）。とあるように ya-dann-u は「出し惜しみする」の意味。アラブは所有財産を、客へのもてなし、貧者救済、親族の血債支払などに当てるのを理想としていた。

77) この詩人の土地は中央アラビアの北、Wādī al-Rumma の下流域にあり、地下水に恵まれ、ナツメヤシの生育に適していた。‘Ushayy は中央アラビアの al-Yamāma の山岳地帯にあり、ここから、アッルンマ溪谷が開けていく。ウシャイイは al-Washm と呼ばれていた。

78) これは枝と枝が触れ合うさまを述べたものであるが、アルアスマーイーはこの詩人はナツメヤシのことに無知であり、間違っているとして、次の言伝えを証拠としている。

‘inna-hum ya-z‘um-ūna ‘anna nakhlāt-an qāl-at li-‘ukhrā ‘ib‘id-ī zill-ī ‘an zill-i-ki ‘a-ḥmil ḥaml-ī wa-ḥaml-a-ki（彼らは言っている、ナツメヤシの樹が他の樹に言った。“貴女の影を私の影からはなしてください。そうすれば私は実をつけ、貴女も実をつけます。”）

つまり、ナツメヤシの樹は樹間を十分とって植えたほうが実りが良い、枝と枝が絡み合うような育て方はなされない。詩人はこの点からして間違っているとしている。

でやせ細ることもない⁷⁹⁾。

- 10- 客は旅をし、ナツメヤシの樹間で、離れてゆくまで立派な休息の場を与えられる。
- 11- これが私たちの財産であり、その他の（樹になる実など）稼ぎもある。よって。蓮台で旅するご婦人よ、私たちへの非難に手心を加えられよ。
- 12- ナツメヤシの樹の娘の娘はラクダなどの娘が渴きに苦しむとき、十分水を飲んでいる⁸⁰⁾。

追記

この詩は冒頭には次の4行があったと、al-ʿAṣmaʿīの高弟 al-Sijistānī [A.H. 255頃没] が *Kitāb al-Nakhla* (ナツメヤシの書) で以下のように取り上げている。最後(16行)は前記一行と同じ主旨のもので、伝承の過程で一部の語句に異動が生じたものと思われる。

- (13)- ウンム・アルフナービス⁸¹⁾ はわれわれを何時までも非難し始めた。そこで私は“やめてくれ”と言った。
- (14)- 彼女は私が、仔のいない一群のラクダを所有し⁸²⁾、乞われるままに与えたり、(他人の) 借金支払に当てたりするのを見た。
- (15)- 即ち、気前よく与えたためラクダはすべていなくなった。毎日、乗り手が他のラクダを綱で結んで連れ去ったのである。
- (16)- 我々はなんと多くのけちんぼどもを見てきたことか。黒や赤の100頭足らずのラクダにしがみついている男たちを。

79) これは6行の後に置くのがよさそうである。

80) これは9行の後に置くべきもの。注釈者は *ṣawādin* (*ṣādiya* の複数) を *ṭiwāl* (長い) と説明しているが、そのように解釈すると、根が長い、根が深いとなってしまう。ナツメヤシの樹はわき芽が出ると、抜いて別の場所に植えられる。従って「根が深い」苗となるわき芽に当てはめるのは、意味をなさない。「のどが渇く、水を熱望する」の意味で解釈すべきと思われる。ナツメヤシの樹本体の根が深いのにつられて考えすぎたものであろう。

81) ʿUmm al-*Khunābis* は詩人を非難した婦人の名。

82) ラクダの群れの単位を表すのに、14行に *ṣirma*、16行に *hajma* が用いられているが、前者は10-50頭、後者は50-100頭の群れを表す。14行の「仔のないラクダ」とは、他人に与えると後に何も残らないことを示している。

— (XV) ムザッリド・ブヌ・ディラール —

まえがき

ムザッリドはあだ名、彼は al-Shammākh と Jaz^z 3兄弟の長兄であった。3人とも詩人であるが、詩集が伝えられているアッシャンマーフがもっとも有名である。3兄弟ともジャーヒリーヤ時代に生まれ、イスラーム時代に改宗したいわゆる mukhaḍramūn に属し、カリフ、ウスマーンの時代またはそれ以上生きていたと言われる。この兄弟の母 Mu'ādha は、本詩集 V の詩人サラマ・ブヌ・フルシュブが属したガタファーン系のアンマール族の者であるが、この部族は多くの有力者を出している。ムザッリドの作品はわずかしかなかったが、風刺詩にすぐれていた。本詩集 XVII の彼の作品は兄弟ジャズウの作との説もある。

アルアンバーリーによると、この詩は次のような事件を背景にしたものである。ムザッリドと同じズブヤーン族系の Jihāsh b. Bajāla b. Māzin b. Tha'laba b. Sa'd b. Zubayn 家に Ubayd 'Allāh と言う男がいて、Abd 'Allāh b. Ghatafān 一族の男、Zur'a b. Thawb の庇護を受けていた。ウバイド・アッラーには Khālid と言う息子がいて、ラクダを飼っていた。ズルアはハーリドをそそのかし、満一歳過ぎのヤギ60頭と雌羊1頭（この詩の9行目では、「わずかなヤギと2匹の犬」となっている）でもって、ラクダ16頭と交換させた。息子が家に帰り父にこのことを話すと、父は不当な交換だとして息子を叱り、ズルアにラクダを返すように要求した。しかし、ズルアは応じなかった。そこで、父ウバイド・アッラーはムザッリドを訪ね、支援を求めた。ムザッリドは必ずラクダを取り返してやると約束してこの詩を詠み、当初の目的を達したとのことである。また注釈者によると、ズルアー門はカリフ、ウスマーンに訴えてムザッリドが風刺するのを止めさせようとした。正統第2代、および第3代カリフは風刺詩人には厳罰で臨んでいた。カリフ、ウスマーンの前に引き出されたムザッリドは自身を弁護する詩を唱え、以後風刺詩は断念すると表明し無罪放免になったとも伝えられている。

この詩は tawil 調、34行となっているが、アルマルズキー注釈書では、21行目のつぎに1行の追加があるので、35行となる。加えて最後に8行が加えられて全体で43行となる。追加されている最後の8行の中には本詩と関わりのなさそうなもの、意味不明なものなどがあるが、追加部分を含め訳してみた。

(XV) テキスト

وَقَالَ مُزَرَّدُ بْنُ ضِرَارٍ الدُّبْيَانِيُّ

١- أَلَا يَا لِقَوْمٍ وَالسَّفَاهَةِ كَأَسْمِهَا أَعَايِدَتِي مِنْ حُبِّ سَلَمَى عَوَائِدِي

- ٢- سُؤْيَقُهُ بَلْبَالٍ إِلَى فَلَجَاتِهَا فَذِي الرِّمْتِ أَبْكَتْنِي لِسَلْمَى مَعَاهِدِي
- ٣- وَقَامَتْ إِلَى جَنْبِ الْحِجَابِ وَمَا بِهَا مِنْ الْوَجْدِ لَوْلَا أَعْيُنُ النَّاسِ عَامِدِي
- ٤- مَعَاهِدُ تَرَعَى بَيْنَهَا كُلُّ رَعْلَةٍ غَرَابِيبُ كَالْهِنْدِ الْحَوَافِي الْحَوَافِدِ
- ٥- تُرَاعَى بِذِي الْعُلَّانِ صَعْلًا كَأَنَّهُ بِذِي الطَّلَحِ جَانِي عُلْفٍ غَيْرُ عَاضِدِ
- ٦- وَقَالَتْ أَلَا تَنْوِي فَتَقْضِي لُبَانَةً أَمَا حَسَنٍ فِينَا وَتَأْتِي مَوَاعِدِي
- ٧- أَتَانِي وَأَهْلِي فِي جُهَنَّةِ دَارُهُمْ أَتَانِي وَأَهْلِي فِي جُهَنَّةِ دَارُهُمْ
- ٨- تَأْوُهُ شَيْخٌ قَاعِدٍ وَعَجُوزُهُ تَأْوُهُ شَيْخٌ قَاعِدٍ وَعَجُوزُهُ
- ٩- وَعَالًا وَعَامًا حِينَ بَاعَا بِأَعْنُرٍ وَعَالًا وَعَامًا حِينَ بَاعَا بِأَعْنُرٍ
- ١٠- هَجَانًا وَحُمْرًا مُعْطَرَاتٍ كَأَنَّهَُا هَجَانًا وَحُمْرًا مُعْطَرَاتٍ كَأَنَّهَُا
- ١١- تُدَقُّ أَوْرَاكُ لَهْنٍ عِرْضَنَةً تُدَقُّ أَوْرَاكُ لَهْنٍ عِرْضَنَةً
- ١٢- أَزْرَعُ بَنَ ثَوْبٍ إِنَّ جَارَاتِ بَيْتِكُمْ أَزْرَعُ بَنَ ثَوْبٍ إِنَّ جَارَاتِ بَيْتِكُمْ
- ١٣- وَأَصْبَحَ جَارَاتُ ابْنِ ثَوْبٍ بَوَاشِمًا وَأَصْبَحَ جَارَاتُ ابْنِ ثَوْبٍ بَوَاشِمًا
- ١٤- تَرَكَتُ ابْنَ ثَوْبٍ وَهُوَ لَا سِتْرَ دُونَهُ تَرَكَتُ ابْنَ ثَوْبٍ وَهُوَ لَا سِتْرَ دُونَهُ
- ١٥- صَقَعْتُ ابْنَ ثَوْبٍ صَقْعَةً لَا حِجَى لَهَا صَقَعْتُ ابْنَ ثَوْبٍ صَقْعَةً لَا حِجَى لَهَا
- ١٦- فَرَدُّوا لِقَاحَ الثَّغْلَبِيِّ أَدَاؤَهَا فَرَدُّوا لِقَاحَ الثَّغْلَبِيِّ أَدَاؤَهَا
- ١٧- فَإِنْ لَمْ تَرُدُّوهَا فَإِنَّ سَمَاعَهَا فَإِنْ لَمْ تَرُدُّوهَا فَإِنَّ سَمَاعَهَا
- ١٨- وَمَا خَالِدٌ مِنَّا وَإِنْ حَلَّ فِيكُمْ وَمَا خَالِدٌ مِنَّا وَإِنْ حَلَّ فِيكُمْ
- ١٩- تَسَفَّهَتْهُ عَنْ مَالِهِ إِذْ رَأَيْتُهُ تَسَفَّهَتْهُ عَنْ مَالِهِ إِذْ رَأَيْتُهُ
- ٢٠- تَحِنُّ لِقَاحُ الثَّغْلَبِيِّ صَبَابَةً تَحِنُّ لِقَاحُ الثَّغْلَبِيِّ صَبَابَةً
- ٢١- وَعَاعَى ابْنُ ثَوْبٍ فِي الرَّعَاءِ بِصُبَّةٍ وَعَاعَى ابْنُ ثَوْبٍ فِي الرَّعَاءِ بِصُبَّةٍ
- ٢٢- فَنِعِمَّتْ لِقَاحُ الْمُحَلِّ يَهْدِي زَفِيرُهَا فَنِعِمَّتْ لِقَاحُ الْمُحَلِّ يَهْدِي زَفِيرُهَا
- ٢٣- أَوْلَاثِكَ أَوْ تِلْكَ الْمُنَاصِي رِبَاعُهَا أَوْلَاثِكَ أَوْ تِلْكَ الْمُنَاصِي رِبَاعُهَا
- ٢٤- فَيَا آلَ ثَوْبٍ إِنَّمَا ذُوْدُ خَالِدٍ فَيَا آلَ ثَوْبٍ إِنَّمَا ذُوْدُ خَالِدٍ
- ٢٥- بِهِنَّ ذُرُوءٌ مِنْ نُحَارٍ وَعُغْدَةٍ بِهِنَّ ذُرُوءٌ مِنْ نُحَارٍ وَعُغْدَةٍ
- ٢٦- جَرَبْنَنَ فَمَا يُهَنَانُ إِلَّا بِغُلْقَةٍ جَرَبْنَنَ فَمَا يُهَنَانُ إِلَّا بِغُلْقَةٍ
- فَذِي الرِّمْتِ أَبْكَتْنِي لِسَلْمَى مَعَاهِدِي
- مِنْ الْوَجْدِ لَوْلَا أَعْيُنُ النَّاسِ عَامِدِي
- غَرَابِيبُ كَالْهِنْدِ الْحَوَافِي الْحَوَافِدِ
- بِذِي الطَّلَحِ جَانِي عُلْفٍ غَيْرُ عَاضِدِ
- أَمَا حَسَنٍ فِينَا وَتَأْتِي مَوَاعِدِي
- بِصُحِّ فَرَضَوِي مِنْ وَرَاءِ الْمَرَايِدِ
- حَرَبَيْنِ بِالصَّلْمَاءِ ذَاتِ الْأَسَاوِدِ
- وَكَلْبَيْنِ لَعْبَانِيَّةٍ كَالْجَلَامِدِ
- حَصَى مَغْرَقَ الْوَانِهَا كَالْمَجَاسِدِ
- عَلَى مَاءٍ يَمْوُودٍ عَصَا كُلِّ ذَائِدِ
- هُزْلَنَ وَالْهَاكَ أَرْتَعَاءُ الرِّغَائِدِ
- مِنْ الشَّرِّ يَشْوِيهِنَّ شَيْءُ الْقَدَائِدِ
- وَلَوْ شِئْتُ غَتَّتْنِي بِثَوْبٍ وَلَا يَدِي
- يُؤْلُو مِنْهَا كُلُّ آسٍ وَعَائِدِ
- أَعَفْتُ وَأَتَقَى مِنْ أَدَى غَيْرِ وَاحِدِ
- لَكُمْ أَبَدًا مِنْ بَاقِيَاتِ الْقَلَائِدِ
- أَبَانَيْنِ بِالثَّائِي وَالْمُتَبَاعِدِ
- غُلَامًا كَقُصْنِ الْبَانَةِ الْمُتَغَايِدِ
- لِأُوطَانِهَا مِنْ غَيْقَةٍ فَالْفَدَائِدِ
- حِيَالٍ وَأُخْرَى لَمْ تَرَ الْفَحْلَ وَالِدِ
- سُرَى الضَّيْفِ أَوْ نِعِمَّتْ مَطَايَا الْمُجَاهِدِ
- مَعَ الرُّبْدِ أَوْلَادُ الْهَجَانِ الْأَوَائِدِ
- كَنَارِ اللَّطَى لَا خَيْرَ فِي ذُوْدِ خَالِدِ
- لَهَا ذَرِبَاتٌ كَالثَّدْيِ النَّوَهِدِ
- عَطِيبٍ وَأَبْوَالِ النَّسَاءِ الْقَوَاعِدِ

- ٢٧- فَلَمْ أَرِ رُزْءًا مِثْلَهُ إِذْ أَتَاكُمْ
 ٢٨- فَيَا لَهْفَى أَنْ لَا تَكُونَ تَعَلَّقْتُ
 ٢٩- فَيَرْجِعَهَا قَوْمٌ كَأَنَّ أَبَاهُمْ
 ٣٠- وَلَوْ جَارَهَا اللَّجْلَاجُ أَوْ لَوْ أَجَارَهَا
 ٣١- وَلَوْ كُنَّ جَارَاتٍ لِأَلٍ مُسَافِعٍ
 ٣٢- وَلَوْ فِي بَنَى الثَّرَمَاءِ حَلَّتْ تَحَدَّبُوا
 ٣٣- مَصَالِيْتُ كَالْأَسْيَافِ ثُمَّ مَصِيرُهُمْ
 ٣٤- وَلَكِنَّهَا فِي مَرْقَبٍ مُتَنَادِرٍ
 ٣٥- فَقُلْتُ وَلَمْ أُمْلِكْ رِزَامَ بْنِ مَارِ بْنِ
 ٣٦- فَيَأْسَتْ أَمْرِي كَأَنْتَ أَمَانِي نَفْسِي
 ٣٧- وَشَالَتْ زِمَجِي خَفَقِي مَشَجَتْ بِهِ
 ٣٨- فَأَيُّهُ بِكُنْدِيرٍ حِمَارِ ابْنِ وَاقِعٍ
 ٣٩- أَطَاعَ لَهُ لَسُ الْعَمِيرِ بَتْلَعَةٍ
 ٤٠- وَلَكِنَّهُ مِنْ أُمَّكُمْ وَأَبْيَكُمْ
 ٤١- فَقَالُوا لَهُ أَقْعُدْ رَاشِدًا قَالَ إِنْ تَكُنْ
 ٤٢- أَتَذْهَبُ مِنْ آلِ الْوَحِيدِ وَلَمْ تَطْفُ
 ٤٣- وَعَهْدِي بِكُمْ تَسْتَنْقِعُونَ مَشَافِرًا
 وَلَا مِثْلَ مَا يُهْدَى هَدِيَّةً شَاكِدٍ
 بِأَسْبَابِ حَبْلٍ لِابْنِ دَارَةَ مَا جِدِ
 بِبَيْشَةَ ضِرْعَامَ طَوَالِ السَّوَاعِدِ
 بَنُو بَاعِثٍ لَمْ تَنْزُ فِي حَبْلٍ صَائِدِ
 لِأَدَيْنَ هَوْنًا مُعْنِقَاتِ الْمَوَارِدِ
 عَلَيْهَا بِأَرْمَاحِ طَوَالِ الْحَدَائِدِ
 إِلَى خَفِرَاتٍ كَالْقُنَا الْمُتَرَائِدِ
 كَأَنَّ بِهَا مِنْهُ خُرُوطَ الْجَدَاجِدِ
 إِلَى ابْنَةِ فِيهَا حَيَاءُ الْخَرَائِدِ
 هِجَائِي وَلَمْ يَجْمَعْ أَدَاةَ الْمُتَاجِدِ
 خِذَاقًا وَقَدْ دَلَّهْنَهُ بِالسَّوَاهِدِ
 رَاكَ بِإِيرٍ فَاشْتَأَى مِنْ عُتَائِدِ
 حِمَارًا يُرَاعِي أُمَّهُ غَيْرَ سَافِدِ
 كَجَارِ زُمَيْتٍ أَوْ كَعَائِدِ زَائِدِ
 لِقَاحِي لَمْ تَرْجِعْ فَلَسْتُ بِرَاشِدِ
 بِكُلِّ مَكَانٍ أَرْبَعُ كَالْخَرَائِدِ
 مِنَ الْمُحْضِ بِالْأَضْيَافِ فَوْقَ الْمَنَاضِدِ

(XV) 訳

- 1- おお、一族の者達よ助けてくれ。愚かさ⁸³⁾は文字通り実にいまいましい。サルマーによせる恋病のために、私は女性の見舞い客たちに、しばしば見舞われるのだろうか。
- 2- スワイカット・バルバールからそれに連なるファラジャートとズー・アッリムスにいたる地方は私とサルマーにとって思い出の土地で、彼女のことを思い出させ、泣かされた。
- 3- 彼女はテントの垂れ幕のそばに立ち寄った。人目がなかったならば、彼女の情熱

83) 「愚かさ」とは詩人が年老いてなお、サルマーへの恋情にこだわっていることを自嘲的にいったものであろう。この詩はカリフ、ウスマーンの時代の作とされているから、詩人はかなり高齢であったと思われる。一風変わったナシーブである。

- は私を重苦しく悩ませ悲しませたことだろう⁸⁴⁾。
- 4- (彼女とよく会った) 地は (いまや、住む人もなく荒れ果てて) ダチョウの群れが草を食べている。それらは、小またで急ぎ歩くインド人のように黒かった⁸⁵⁾。
- 5- ダチョウの群れは溪谷で頭が小さくて首の長い雄ダチョウと餌を食べるが、雄ダチョウは枝を折ることなくズー・アッタフルでアカシアの実を餌にしている⁸⁶⁾。
- 6- 彼女は言った、“私たちのところに留まって、思いを遂げないのですか、アブー・ハサン、私に約束なさったことを果たされないのですか?”と⁸⁷⁾。
- 7- 私の家族がラクダの囲いの背後のニウスとラドワー山の間のジュハイナにテントを張って住んでいた時に、知らせが届いた。
- 8- 即ち、それは黒蛇の多い土地アッサルアーイ (または、アッサルアーイ・ザート・アルアサーウド)⁸⁸⁾に住む、歩けなくなった老人とその老妻の嘆きの声であった。
- 9- 老夫妻は乳が欲しいのだが困窮してしまっていてどうにもならなくなっていた。彼らはすでにわずかなヤギと二匹の犬とひきかえに巨岩のように大きくて頑丈な⁸⁹⁾ 雌ラクダを売ってしまっていた。
- 10- (手放した) ラクダは白や赤のラクダで丸々と太っていた。まるで赤い粘土の塊のようであり、また、サフランで染めた衣のような色合いのラクダであった。
- 11- ヤムウードの水場では、これらのラクダは頑強なお尻で、水場にラクダが近づくのを防ごうとする番人の棒をことごとくへし折るほどであった。
- 12- ズルア・ブヌ・サウブよ、お前に庇護されている女たち、すなわち、ラクダを買い取られた女たちはやせ細っているのに、お前は有り余るミルクの泡をすすって楽しんでいるのか。(早々ラクダを返してやれ)。
- 13- (ズルア) ブヌ・サウブに庇護されている女たちは、彼の悪行を満腹させられ消化不良をきたしている。彼は彼女らをうす切りにした干し肉を焼くように虐待してきた。
- 14- 私は (ズルア) ブヌ・サウブに彼自身を守るすべのないままに捨て置いてきたが、何時なりと、私の奴隷娘たちが私に歌って聞かせるお前を風刺する詩を作るであろう⁹⁰⁾。
- 15- 私は (ズルア) ブヌ・サウブの頭に一撃⁹¹⁾を加え分別を奪ってやる。それを見

84) これはおそらく5行の後におかれるべきものと思われる。

85) ダチョウの黒さとその体形をインド人に譬えている。

86) ダチョウは藪の木の实を餌にしている。アカシアの実も餌になり、枝を折らずに食べる。これに引き換え人間は枝を切って実を集め、皮をなめすのに用いる。この比較をほのめかしているようだ。

87) ナシーブはこの行で突然終わっている。次にラクダによる旅の部分はなく主題に入るので、何行かが失われたのかもしれない。

88) dhāt al-ʿasāwid は地名ととるか、黒い大蛇ととるかにより訳が変わるが、注釈者は地名としている。

89) laʿbāniya はパーレーンの塩分を含んだ沼沢地 Laʿba に由来する単語で、注釈では表面が固い石で覆われた土地としている。ガタファーン族の領域にも同じ地名がある。(ヤークート『地名辞典』参照)

90) 風刺詩を武器としてラクダを取り返すことをほのめかしている。

91) 「一撃」とは風刺詩による打撃をさす。

ると医者も見舞い客も泣き喚くであろう。

- 16- よって、サアラブ家の乳ラクダを返すがよい。返すことは神妙なことであり、(私の風刺詩で) 多数の者が傷つけられるのに比べ、よりよくお前の身を守ることでもある。
- 17- だがもし、お前たちがラクダを返さないのであれば、お前らが下げている首飾りのように、われらの風刺がいつまでもお前たちにまとわりつくであろう。
- 18- われらの一族であるハーリドは我々から離れて二つのアバーン山⁹²⁾の麓で、お前たちのなかで暮らしているが、われらとそれほど遠くにいないわけではない。
- 19- おまえはハーリドを欺いて彼のラクダを奪った。お前は彼がいまだバーンの樹⁹³⁾のしなやかで、柔らかな枝のような子童と見下げたのである。
- 20- (お前が奪った) サアラブ家の乳ラクダはガイカとアルファダーイドの故郷を懐かしんで泣いている⁹⁴⁾。
- 21- (ズルア) ブヌ・サウブは牧童のなかで、アーアーと叫んだが⁹⁵⁾、まるで、不妊ラクダや仔を生んだばかりで、種ラクダを見ていないラクダの群れに、(羊や山羊を呼び掛ける声で) 呼びかけているようであった。
- 22- 旱魃時における乳ラクダはなんと立派であろうか。その泣き声は夜旅する客を正しくみちびく。またそれは、困難に立ち向かう者の乗り物としてなんと優れたものであろうか。

(この一行はアルマルズキーによるもの、以下、アルアンバーリーの行番号を繰り下げる。すなわち、22行は23行とする。)

- 23- それら不妊ラクダや母ラクダがいるが、これにつきまとう春生まれの仔ラクダは野生の純白のレイヨウのように白く、灰色のダチョウと一緒に草を食べている⁹⁶⁾。
- 24- サウブ家の者達よ、ハーリドのラクダの群れは燃え盛る炎のようなものだぞ。彼のラクダの群れはお前たちに益するところは皆無だ⁹⁷⁾。
- 25- 即ち、これらのラクダはひどい咳をし伝染病にかかっている、悪性の腫れ物に冒されている。先のとがった腫れ物の頭は胸の張った乙女の乳首のように目立っている。
- 26- これらのラクダは疥癬に冒されており、悪臭を放つガルカの樹液⁹⁸⁾と老婆の尿が体中にぬられている。

92) 「二つの 'abān (山)」とは Wādī Rumma の溪谷の両側にそそり立つ山で一方は白く、他方は、黒い。白山のほうは、アブス族、黒山のほうはファザーラ族の居住地であり、両者ともガタファーン族系。詩人はヒジャーズのガタファーンの領域の西部に住んでおり、アナーン山とははるかに離れているが、遠くないと言うのは近親感を訴えた表現。

93) バーンの樹の緑色のしなやかな枝は詩人らにより若い男女によく比せられる。

94) min を所属する一部と解したが、「これらの地から」ととると訳が変わる。

95) 'a'a という叫び声は羊や山羊にかけるものである。山羊と二匹の犬でもって、召しあげたラクダにこの呼びかけをしているとあざけったもの。

96) 前後とつながらない一行である。

97) ハーリドから奪ったラクダが災難をもたらすと警告している。

98) ghalqa の樹皮や小枝を水に浸しておくとも悪臭を放つ液体となり、皮なめしに用いられる。

- 27- ハーリドがお前たちのもとへ移ったすえこのような災難、(またお前たちが彼のラクダを奪い) 彼に支払ったわずかなお返し、いずれも私は今まで見たこともないひどいものだ。
- 28- ああ、悲しいかな。ラクダどもが(ラクダの持ち主であったハーリドが)⁹⁹⁾(サーリム) ブヌ・ダーラの手厚い庇護の綱を掴んでおればよかったのに。
- 29- さすれば、あの者達は奪ったラクダを返していただろう。彼らの父はビーシャの地¹⁰⁰⁾に住んでいるが、前腕が長くライオンのように勇敢な人物である。
- 30- 万一、アッラジュラージュ¹⁰¹⁾がラクダを庇護しておれば、あるいは、バヌー・バーイスが庇護しておれば、狩人のわなにかからなかったろうに。
- 31- また、雌ラクダどもがムサーフィウ家¹⁰²⁾に庇護されていたなら、水場へ急いでいくように、やすやすとかえされたであろうに。
- 32- もしも、ラクダどもがバヌー・アッサルマーウ¹⁰³⁾のところにいたのであれば、彼らはラクダに同情して鉄の穂先のついた長槍でまもってくれたであろうに。
- 33- 抜刀のように俊敏な戦士らは、(戦いが終われば)、左右に戯れる葦のようにしなやかで、はにかむ妻のもとへ帰り行く¹⁰⁴⁾。
- 34- しかし、ラクダどもは人々が警告しあうような、危ない高所にいて、ラクダの皮膚にはコウロギがかじったような傷跡がある¹⁰⁵⁾。
- 35- 私は自制することが出来ず、言った。リザーム・ブヌ・マージン¹⁰⁶⁾よ、おまえは卑劣なことをした。美女らとて、恥ずかしくて顔を上げられない恥辱を覚えるほどの愚行である。
- 36- 恥知らずなイブン・ダーラよ、お前は私と罵りあいを競うのを望んでいるようだが、私と競うだけの道具(風刺詩作成能力)は持ち合わせていない¹⁰⁷⁾。

99) この文の主語はラクダとして訳したが、注釈ではハーリドとなっている。(Salīm) b. Dāra はサウブー族が属する‘Abd ‘Allāh b. Ghatafān の詩人で、ここでは信頼のおける人物として褒められているが、後でムザッリドと風刺能力で言い争う。

100) Bīsha はメッカとアルヤマンの間の村で‘Amir b. Ṣaṣa‘ および Khath‘am の両部族が住んでいた。その近くにはライオンが多いタマリスクの森があったと言われている。

101) al-Lajlāj は元 ‘Abd al-‘Uzzā (後にムハンマドにより Banū ‘Abd ‘Allāh に改名させられた) 部族の族長で、ガタファーン系に属する。Bā‘ith もガタファーン系の部族。注釈では Ṣa‘īd をハーリドのラクダを取り上げた男の名としているが、すでにその男はズルアとなっており、狩人とするのが自然。また、jār-a と ‘ajār-a が同じ意味で用いられているのは不自然と思う。

102) Musāfi‘ 家は Muzayna 族に属し、ガタファーン族と同盟し近くに住んでいた。

103) Banū al-Tharmā‘ は Qays 系または Banū ‘Abd ‘Allāh b. Ghatafān 系と言われ、前者なら Muḥārib のことであろう。

104) おそらく32行の Banū al-Tharmā‘ の戦士らを指す“かれら”が主語であろう。

105) 後半はラクダに傷跡があると言っているようだが、はっきりした注釈がない。kḥurūt, qurūd, furūd の3種の伝承があるが、いずれも刻み目を表す単語である。

106) Rizām b. Māzin は詩人と同系のズブヤーン族に属する一門であるが、‘Abd ‘Allāh b. Ghatafān にたいして強い姿勢を示さなかったために、詩人が非難したものであろう。後半は女性自身が恥辱を受けたと言うよりも、彼らの煮え切らない態度が最もひどい恥辱だと強調したもの。ただしこの一行は前後の関係が不明で、他の詩から紛れ込んだ可能性もある。

107) 明らかに28行で褒められたサーリム・ブヌ・ダーラを中傷したものである。アルアンバーリーは両詩人の風刺能力論争を次のような逸話で伝えている。(以下、詩人は M、サーリム・ブヌ・ダーラは S)

- 37- 雁が軽やかな尾のはねを上げて、彼の上に糞を落とした。彼は仔の不運のためにうろたえてしまったようだ。
- 38- よって、イブン・ワーキウの大きなロバに声を掛け助けをもとめよ。ロバは（ガタファーン族の）イール山にいるお前を見て（ムッラ族の）丘から一走りして助けに来るだろう。
- 39- 丘の上でロバは草を欲しいだけ食べることが出来る。そのロバは母ロバと交尾することなく一緒に放牧されている。
- 40- しかしながら、お前たちの父母の血筋を引く者で（庇護すべきだ）、ちょうどズマイトやアーイズ・ザーイドらを庇護しているように。
- 41- 彼らは彼（ハーリドまたは彼の父）にいった。“分別をわきまえて座れ”と。彼は“私の乳ラクダが返ってこないなら、分別ある態度はとれない”。
- 42- （バヌー・キラーブ）のアルワヒード一門のもとから去るのか。処女のような四人の女が各地を巡らなかったのか。
- 43- 私があなた方と会ったときのことだが、あなた方はお客らと一緒に寝台の上で混ざりけのないミルクを飲んで唇の渴きを癒していた。

S: ムザッリドよ、私を褒めてわが一門をけなしてくれたが、私が納得していると思っているのか。（一門のために貴様を中傷してやるとの脅し文句）。

M: 何をしたいのか。（勝手にしろ、中傷するなら仕返してやるまでだ、との脅し）

S: 神に誓って、貴様は私が大きな水袋を二つしっかりと持っているのを見たか。（相手を風刺する材料が多々あるぞと脅している）

M: 神に誓って、お前は水の溜れなかった古井戸をきつと空っぽの井戸にかえてしまう。（私の風刺能力は無限であるが、お前のそれはすぐ減ってしまうぞ）。

このやり取りを聞いていた人々は、（井戸が溜れれば）ラクダは死ぬ。（サーリム・ブヌ・ダーラの負け）といって笑い、ムザッリドは相手の風刺を続けた。（アルアンバーリー p. 139）

いずれにせよ、アルマルズキーによる36行以下は、話題が一貫せず、卑猥な表現もあり、不明な点が多く、一応文字面を頼りに訳したものである。

— (XVI) アルマッラール・ブヌ・ムンキズ —

まえがき

この詩人は、すでに本詩集 XIV で登場している。ここで取り上げる長詩は95行に及ぶ長いものであるが、何かの手違いで二つの長詩を一つに合わせたものである。即ち、1-52行と53-95行とは、韻律、脚韻とも同じであるが、内容が異なる別々の長詩となっている。最初の詩は詩人の自由の表現、自己の功績を誇ったものである、8-26行では馬の描写、27-30行ではラクダと野生のロバの比較、38-52行では詩人の武勇と善行を自慢している。なお、31-37行には欠落部分が認められる。イブン・クタイバ（『詩と詩人達』 p.439）はこの長詩の一行目は本詩53行目としているので、二つの長詩が合体したものということには気づいていたらしいが、後半の長詩が馬に関するものとしているのは明らかに過ちである。そうではなく、後の詩においては、女性の美しさについて一般的に言及し、ついで、詩人の恋人のことをとりあげており、当時のアラブ女性の美しさの基準を伺う一助となろう。ramal 調、95行。

(XVI) テキスト

وَقَالَ الْمَرَارُ بْنُ مُنْقِذٍ أَيْضًا

- | | |
|--|---|
| أَمْ رَأَتْ خَوْلَةً شَيْخًا قَدْ كَبِرَ | ١- عَجَبٌ خَوْلَةً إِذْ تُنْكِرُنِي |
| وَتَحَنَّنَى الظَّهْرُ مِنْهُ فَأُطِرَ | ٢- وَكَسَاهُ الدَّهْرُ سَبًّا نَاصِعًا |
| ذُو بَلَاءٍ حَسَنٍ غَيْرُ غُمُرَ | ٣- إِنْ تَرَى شَيْبًا فَإِنِّي مَاجِدٌ |
| يَا بَنَةَ الْقَوْمِ تَوَلَّى بِحَسِرَ | ٤- مَا أَنَا الْيَوْمَ عَلَى شَيْءٍ مَضَى |
| كُلٌّ فَنِّ حَسَنٍ مِنْهُ حَبِرَ | ٥- قَدْ لَبِسْتُ الدَّهْرَ مِنْ أَفْنَانِهِ |
| بَغْرَالٍ أَحْوَرِ الْعَيْنَيْنِ غُرَ | ٦- وَتَعَلَّلْتُ وَبَالِي نَاعِمٌ |
| وَإِكْفَ الْكُوكَبِ ذَا نَوْرِ ثَمِرَ | ٧- وَتَبَطَّنْتُ مَجُودًا عَازِبًا |
| صَلَتَانِ مِنْ بَنَاتِ الْمُنْكَدِرِ | ٨- بِبَعِيدٍ قَدْرُهُ ذِي عُذْرِ |
| سَلَطِ السُّنْبُكِ فِي رُشْغٍ عَجُرَ | ٩- سَائِلِ شِمْرَاخَهُ ذِي جُبَبٍ |
| وَرَبَاعٍ جَانِبٍ لَمْ يَتَّغُرَ | ١٠- قَارِحٍ قَدْ فُرَّ عَنْهُ جَانِبٌ |
| وَكُمَيْتِ اللَّوْنِ مَا لَمْ يَزْبُرَ | ١١- فَهُوَ وَرْدُ اللَّوْنِ فِي أَرْبَعَرَارِهِ |

- ١٢- نَبَعْتُ الحُطَابَ أَنْ يُغْدَى بِهِ
 ١٣- شُنْدُفٌ أَشْدَفُ مَا وَرَعْتَهُ
 ١٤- يَصْرَعُ العَيْرَيْنِ فِي نَفْعِهِمَا
 ١٥- ثُمَّ إِنْ يُنْزَعِ إِلَى أَقْصَاهُمَا
 ١٦- أَلَزَّ إِذْ خَرَجْتَ سَلْتُهُ
 ١٧- قَدْ بَلَوْنَاهُ عَلَى عِلَاتِهِ
 ١٨- فَإِذَا هِجْنَاهُ يَوْمًا بَادِنَا
 ١٩- وَإِذَا نَحْنُ حَمَصْنَا بُدْنَهُ
 ٢٠- يُؤْلِفُ الشَّدَّ عَلَى الشَّدِّ كَمَا
 ٢١- صِفَةُ الثَّغْلِبِ أَذْنَى جَرِيهِ
 ٢٢- وَنَشَاصِي إِذَا تُفْرِغُهُ
 ٢٣- وَكَأَنَّا كُلَّمَا نَعْدُو بِهِ
 ٢٤- أَوْ بِمِرْيَخٍ عَلَى شِرْيَانَةٍ
 ٢٥- ذُو مِرَاحٍ فَإِذَا وَقَرْتَهُ
 ٢٦- بَيْنَ أَفْرَاسٍ تَنَاجِلْنَ بِهِ
 ٢٧- وَلَقَدْ تَمَرَحُ بِى عَيْدِيَّةٌ
 ٢٨- رَاضَهَا الرَّاِيضُ ثُمَّ اسْتَعْفِيَتْ
 ٢٩- بَارِلٌ أَوْ أَخْلَفَتْ بَارِلَهَا
 ٣٠- تَتَّقِي الْأَرْضَ وَصَوَانَ الحَصَى
 ٣١- مِثْلَ عَدَائٍ يَرُوضَاتِ القَطَا
 ٣٢- فَحَلِي قُبِّ ضُمِّ أَقْرَابِهَا
 ٣٣- خَبَطَ الْأَرْوَاثَ حَتَّى هَاجَهُ
 ٣٤- لَهَبَانٌ وَقَدَتْ حِرَّانُهُ
 ٣٥- ظِلٌّ فِي أَعْلَى يَفَاعٍ جَاذِلًا
 ٣٦- أَلْسُمَانٍ فَيَسْقِيهَا بِهِ
- نَبَتَغَى صَيْدَ نَعَامٍ أَوْ حُمُرٍ
 فَإِذَا طُوطِيٌّ طَيَّارٌ طِمِرٌ
 أَحْوَذِيٌّ حِينَ يَهْوَى مُسْتَمِرٌ
 يَخْبِطُ الْأَرْضَ أَخْبَاطَ الْمُحْتَفِرِ
 وَهَلَّا نَمَسَحُهُ مَا يَسْتَقِرُّ
 وَعَلَى التَّيْسِيرِ مِنْهُ وَالضُّمُرُ
 فَحَضَارٌ كَالضَّرَامِ الْمُسْتَعِرِ
 وَعَصَرْنَاهُ فَعَقَبَ وَحُضِرُ
 حَفَشَ الْوَابِلَ غَيْثٌ مُسْبِكِرٌ
 وَإِذَا يُرْكَضُ يَغْفُورٌ أَشْرُ
 لَمْ يَكْذُ يُلْجَمُ إِلَّا مَا قُسِرُ
 نَبَتَغَى الصَّيْدَ بِبَارٍ مُنْكَدِرُ
 حَشَّةُ الرَّامِي بِظَهْرَانٍ حُشُرُ
 فَذُلُولٌ حَسَنُ الْخُلُقِ يَسِرُ
 أَعْوَجِيَّاتٍ مَخَاضِيرَ ضُبُرُ
 رَسَلَةُ السَّوْمِ سَبْتَاةٌ جُسُرُ
 لِقَرَى الْهَمِّ إِذَا مَا يَحْتَضِرُ
 عَاقِرٌ لَمْ يُحْتَلَبَ مِنْهَا فُطُرُ
 بِوَقَاحٍ مُجَمَّرٍ غَيْرِ مَعِرُ
 قَلَصَتْ عَنْهُ ثِمَادٌ وَعُغْدُرُ
 يَنْهَسُ الْأَكْفَالَ مِنْهَا وَيَزُرُ
 مِنْ يَدِ الْجَوَزَاءِ يَوْمَ مُصَمَقِرُ
 يَرْمَضُ الْجُنْدُبُ مِنْهُ فَيَصِرُ
 يَقْسِمُ الْأَمْرَ كَقَسَمِ الْمُؤْتَمِرِ
 أَمْ لِقُلْبٍ مِنْ لُعَاطٍ يَسْتَمِرُ

- ۳۷- وَهُوَ يَقْلِي شَعْنًا أَعْرَافُهَا
 ۳۸- وَدَخَلْتُ الْبَابَ لَا أُعْطِي الرُّشَى
 ۳۹- كَمْ تَرَى مِنْ شَانِيٍّ يَحْسُدُنِي
 ۴۰- وَحَشَوْتُ الْغَيْظَ فِي أَضْلَاعِهِ
 ۴۱- لَمْ يَضْرِبْنِي وَلَقَدْ بَلَغْتُهُ
 ۴۲- فَهُوَ لَا يَبْرَأُ مَا فِي نَفْسِهِ
 ۴۳- وَعَظِيمِ الْمُلْكِ قَدْ أَوْعَدَنِي
 ۴۴- حَتَّى قَدْ وَقَدْتُ عَيْنَاهُ لِي
 ۴۵- وَيَرَى دُونِي فَلَا يَسْطِيعُنِي
 ۴۶- أَنَا مِنْ خُنْدَفٍ فِي ضِيَابِهَا
 ۴۷- وَلِي السَّبْعَةُ مِنْ سُلَافِهَا
 ۴۸- وَلِي الزُّنْدُ الَّذِي يُورِي بِهِ
 ۴۹- وَأَنَا الْمَذْكُورُ مِنْ فِتْيَانِهَا
 ۵۰- أَعْرِفُ الْحَقَّ فَلَا أَنْكِرُهُ
 ۵۱- لَا تَرَى كَلْبِي إِلَّا آتِسًا
 ۵۲- كَثَرَ النَّاسُ فَمَا يُنْكِرُهُمْ
 ۵۳- هَلْ عَرَفْتَ الدَّارَ أَمْ أَنْكَرْتَهَا
 ۵۴- جَرَّرَ السَّيْلُ بِهَا عُثْنُونَهُ
 ۵۵- يَتَقَارِضُنَ بِهَا حَتَّى أَشْتَوَتْ
 ۵۶- وَتَرَى مِنْهَا رُسُومًا قَدْ عَفَتْ
 ۵۷- قَدْ نَرَى الْبَيْضَ بِهَا مِثْلَ الدَّمَى
 ۵۸- يَتَلَهَّيْنَ بِنَوْمَاتِ الضُّحَى
 ۵۹- قُطِفَ الْمَشْيِ قَرِيَّاتِ الْخُطَى
 ۶۰- يَتَرَاوَرْنَ كَتَقْطَاءِ الْقَطَا
 ۶۱- لَمْ يُطَاوِعَنَّ بِضُرْمٍ عَاذِلًا
- شُخْصَ الْأَبْصَارِ لِلْوَحْشِ نُظُرُ
 فَحَبَانِي مَلِكٌ غَيْرُ زَمَرُ
 قَدْ وَرَاهُ الْغَيْظُ فِي صَدْرٍ وَغَيْرُ
 فَهُوَ يَمْشِي حَظْلَانًا كَالنَّقَرُ
 قَطَعَ الْغَيْظُ بِصَافٍ وَصَبْرُ
 مِثْلَ مَا لَا يَبْرَأُ الْعِرْقُ النَّعْرُ
 وَأَتَعْنِي دُونَهُ مِنْهُ النَّذْرُ
 مِثْلَ مَا وَقَدَ عَيْنِيهِ النَّمْرُ
 خَرَطَ شَوْكٍ مِنْ قَتَادٍ مُسْمَهَرُ
 حَيْثُ طَابَ الْقَبْصُ مِنْهُ وَكَثُرُ
 وَلِي الْهَامَةُ مِنْهَا وَالْكُبْرُ
 إِنْ كَبَا زَنْدٌ لَيْمٍ أَوْ قَصُرُ
 بِفَعَالٍ الْخَيْرِ إِنْ فَعَلَ ذِكْرُ
 وَكِلَابِي أَنَسٌ غَيْرُ عُقْرِ
 إِنْ أَتَى خَابِطٌ لَيْلٍ لَمْ يَهْرُ
 مِنْ أَسِيفٍ يَبْتَغِي الْخَيْرَ وَحُرُ
 بَيْنَ تَبْرَاكِ فَشَسْنَى عَبْقُرُ
 وَتَعَفَّتْهَا مَدَالِيحُ بُكْرُ
 أَشْهُرَ الصَّيْفِ بِسَافٍ مُنْفَجِرُ
 مِثْلَ خَطِّ اللَّامِ فِي وَحْيِ الزُّبُرُ
 لَمْ يَخْنُهَنَّ زَمَانٌ مُقْشَعِرُ
 رَاجِحَاتِ الْجِلْمِ وَالْأَنْسِ خُفْرُ
 بُدْنًا مِثْلَ الْعَمَامِ الْمُزْمَخِرُ
 وَطَعْمَنَ الْعَيْشَ حُلُومًا غَيْرَ مُرُ
 كَادَ مِنْ شِدَّةٍ لَوْمْ يَنْتَحِرُ

- ۶۲- وَهَوَى الْقَلْبِ الَّذِي أَعْجَبَهُ
 ۶۳- رَاقَهُ مِنْهَا بَيَاضٌ نَاصِعٌ
 ۶۴- تَهْلِكُ الْمِدْرَاةُ فِي أَفْنَانِهِ
 ۶۵- جَعْدَةٌ فَرَعَاءٌ فِي جُمُجْمَةٍ
 ۶۶- شَادِخٌ غُرَّتْهَا مِنْ نِسْوَةٍ
 ۶۷- وَلَهَا عَيْنَا خَذُولٍ مُخْرِفٍ
 ۶۸- وَإِذَا تَضَحَّكَ أَبْدَى ضِحْكُهَا
 ۶۹- لَوْ تَطَعَّمَتْ بِهِ شَبَّهَتْهُ
 ۷۰- صَلْتَةُ الْخَدِّ طَوِيلٌ حِيدُهَا
 ۷۱- مِثْلُ أَنْفِ الرِّثْمِ يُنْبِي دِرْعَهَا
 ۷۲- فَهِيَ هَيْفَاءٌ هَضِيمٌ كَشَحُهَا
 ۷۳- يَبْهَظُ الْمِفْضَلُ مِنْ أُرْدَافِهَا
 ۷۴- وَإِذَا تَمْشَى إِلَى جَارَاتِهَا
 ۷۵- دَفَعَتْ رَبْلَتُهَا رَبْلَتَهَا
 ۷۶- وَهِيَ بَدَاءٌ إِذَا مَا أَقْبَلَتْ
 ۷۷- يُضْرَبُ السَّبْعُونَ فِي خَلْخَالِهَا
 ۷۸- نَاعَمَتْهَا أُمُّ صِدْقٍ بَرَّةٌ
 ۷۹- فَهِيَ خَذَوَاءٌ بَعِيشٍ نَاعِمٍ
 ۸۰- لَا تَمَسُّ الْأَرْضَ إِلَّا دُونَهَا
 ۸۱- تَطَأُ الْخَزَّ وَلَا تُكْرِمُهُ
 ۸۲- وَتَرَى الرِّيطَ مَوَادِيعَ لَهَا
 ۸۳- ثُمَّ تَنْهَدُ عَلَى أَنْمَاطِهَا
 ۸۴- عَبَقُ الْعَنْبَرِ وَالْمِسْكِ بِهَا
 ۸۵- إِنَّمَا النَّوْمُ عِشَاءٌ طِفْلًا
 ۸۶- وَالضُّحَى تَغْلِبُهَا وَقَدْتُهَا
 صُورَةٌ أَحْسَنُ مِنْ لَآثِ الْخُمْرِ
 يُؤْنِقُ الْعَيْنَ وَضَافٍ مُسْبِكِرٌ
 فَإِذَا مَا أَرْسَلَتْهُ يَنْعَفِرُ
 ضَخْمَةٌ تَفْرِقُ عَنْهَا كَالضُّفْرِ
 كُنَّ يَفْضُلْنَ نِسَاءَ النَّاسِ غُرٌ
 تَعْلَقُ الصَّالَ وَأَفْنَانَ السُّمْرِ
 أَفْحُونَا قَيِّدَتُهُ ذَا أَشْرٍ
 عَسَلًا شَيْبَ بِهِ ثُلُجٌ خَصِرُ
 نَاهِدُ الثَّدْيِ وَلَمَّا يَنْكَسِرُ
 فِي لَبَانٍ بَادِنٍ غَيْرِ قَفِرٍ
 فَخَمَةٌ حَيْثُ يُشَدُّ الْمُؤْتَزَرُ
 ضَفِرٌ أُرْدِفَ أَنْقَاءَ ضَفِرٍ
 لَمْ تَكْدُ تَبْلُغْ حَتَّى تَنْهَرُ
 وَتَهَادَتْ مِثْلَ مَيْلِ الْمُتَقَعِرِ
 ضَخْمَةُ الْجِسْمِ رَدَاحٌ هَيْدُكُرُ
 فَإِذَا مَا أَكْرَهَتْهُ يَنْكَسِرُ
 وَأَبٌ بَرٌّ بِهَا غَيْرُ حَكِرٍ
 بَرَدَ الْعَيْشُ عَلَيْهَا وَقُصِرُ
 عَنْ بَلَاطِ الْأَرْضِ ثَوْبٌ مُنْعَفِرُ
 وَتُطِيلُ الذَّيْلَ مِنْهُ وَتَجْرُ
 شُعْرًا تَلْبَسُهَا بَعْدَ شُعْرٍ
 مِثْلَ مَا مَالَ كَثِيبٌ مُنْعَفِرُ
 فَهِيَ صَفَرَاءُ كَعْرُجُونِ الْعُمُرِ
 سِنَّةٌ تَأْخُذُهَا مِثْلَ السُّكْرِ
 حَرَقَ الْجُودَرِ فِي الْيَوْمِ الْحَدِرِ

- ۸۷- وَهِيَ لَوْ يُعْصِرُ مِنْ أُرْدَانِهَا عَبَقُ الْمِسْكِ لَكَادَتْ تَنْعَصِرُ
 ۸۸- أَمْلَحُ الْخَلْقِ إِذَا جَرَّدَتْهَا غَيْرَ سَمْطَيْنِ عَلَيْهَا وَسُورُ
 ۸۹- لَحَسِبْتَ الشَّمْسُ فِي جِلْبَابِهَا قَدْ تَبَدَّتْ مِنْ غَمَامٍ مُنْسِفِرُ
 ۹۰- صُورَةُ الشَّمْسِ عَلَى صُورَتِهَا كُلَّمَا تَغَرَّبَ شَمْسٌ أَوْ تَذُرُ
 ۹۱- تَرَكْتَنِي لَسْتُ بِالْحَيِّ وَلَا مَيِّتٍ لَأَقَى وَفَاءً فَقِيرُ
 ۹۲- يَسْئَلُ النَّاسُ أَحْمَى دَاوُهُ أَمْ بِهِ كَانَ سُلَالٌ مُسْتَسِيرُ
 ۹۳- وَهِيَ دَائِي وَشِفَائِي عِنْدَهَا مَنَعْتُهُ فَهُوَ مَلَوِي عَسِرُ
 ۹۴- وَهِيَ لَوْ يَقْتُلُهَا بِي إِخْوَتِي أَدْرَكَ الطَّالِبُ مِنْهُمْ وَظَفِرُ
 ۹۵- مَا أَنَا الدَّهْرَ بِئَاسٍ ذِكْرُهَا مَا غَدَتْ وَرَقَاءُ تَدْعُو سَاقَ حُرُ

(XVI) 訳

- 1- まことに奇妙なことよ。ハウラがわたしを知らないとは。それとも、ハウラは私を老いさらばえた翁と見なしたのか。
- 2- 歳月は彼に白髪のパールを着せ、その背は曲がり、腰は折れた、(と見なしたのか)。
- 3- そなたが私の白髪を見たとしても(心配無用)。わたしははつらつとしており、功績を積み、幸運に恵まれ、経験も豊かである。
- 4- 部族の娘よ、私は今日ともなれば、過ぎ去り、立ち去った者のことで悲しむような男ではない¹⁰⁸⁾。
- 5- 私は時世の様々な衣装を着たものだ。どれもこれも美しく。飾られた衣装であった¹⁰⁹⁾。
- 6- 私は嬉々として、いまだ恋を知らない美しい黒目のガゼル(のような乙女)と戯れの恋をして楽しんだ。
- 7- 私は人気のない雨に恵まれた草原のなかに(狩をしようと)入ったが、そこには豊かな雨水が注ぎ草花が咲き乱れ、緑が覆っていた。
- 8- 私は(そこへ) たてがみをなびかせて駆ける馬に乗って行だったが、それは(名馬)アルムカンデイル¹¹⁰⁾の血統をひく馬であった。
- 9- 馬の額の白筋は鼻の上まで長く伸び、(脚を見ると)踝の上まで白い毛が覆い、ひずめは長く太かった。

108) 恋人ハウラにたいして、関係を断って分かれていくならかまわない。別段悲しむものではない、と告げている。

109) 「過去に様々な楽しい経験をした」の意。

110) al-Mukandirは有名な種馬。なお、26行には 'A'waj という種馬の名が出ている。

- 10- 片側の歯並びを調べてみると、完全に成長しており、他方の歯並びは4歳馬のそれであり乳歯はまだ抜けていない。
- 11- 馬が逆毛を立てると赤褐色の鹿毛となり、逆毛をたてないときには濃い栗毛となる。
- 12- 私たちはその馬に乗ってダチョウか野生のロバを狩るときには、薪集めをする者達をさきに送り出す¹¹¹⁾。
- 13- 馬は手綱で制御しようとしても一方に体を傾けようとするが、一度けしかけられると飛鳥のように駆けだす。
- 14- この馬は野生のロバ二頭が（逃げようとして）ほこりを立てるや否や追いついてけり倒す。襲いかかるときには常に敏捷である。
- 15- 二頭のロバを蹴り殺したところで手綱を引かれてとめられると、馬は穴掘り人が穴を掘るかのように、前足で地面を搔く。
- 16- この馬の体は良く引き締まっており、荒い息が収まり、櫛を掛けてなだめてやっても驚いた様子で落ち着かず、（今に駆け出しそうだ）。
- 17- 私たちは様々な状況のもとでこの馬をきたえてきた。太っているときも、痩せているときもきたえてきた。
- 18- それが太っている頃のある日、けしかけてみると、薪が燃えるように激しく駆け¹¹²⁾。
- 19- 私たちが馬の肥満を除き両足で駆け立てると、疾駆を繰り返してなお倦まずに駆け¹¹³⁾。
- 20- この馬は早駆けに早駆けを重ねるが、まるで垂れ下がった雨雲が豪雨に豪雨を重ねるかのようである。
- 21- 馬が最も緩やかに走る時でも、狐の走力に匹敵し、駆けさせれば敏捷なカモシカのように走る。
- 22- この馬を驚かすと高い雲のように聳え立ち、無理強いされない限り轡をはめられるのを拒む¹¹³⁾。
- 23- 私たちは早朝にこの馬に乗って狩りに出かけるが、まるで獲物に飛び掛かるタカに乗っているようだ。
- 24- または、シルヤーナの樹で作られた弓から射られる矢に乗っているようである。射手は（飛距離を伸ばすために）その矢に翼の短い羽をつけている。
- 25- 馬は元気にはつらつとしており、落ち着かせると、従順で性格に優れ御しやすくなる。
- 26- この馬を産んだ親馬のなかにはアウワジュ¹¹⁴⁾の血統につながる駿足で跳躍力に優れた馬が含まれている。

111) 狩猟に出かける場合には、獲物を料理する者達を先行させていた。

112) *dirām* とは太い薪に火をつける小枝のこと。馬が駆け¹¹²⁾るのをしばしば薪や葦が燃えているのに譬えているが、パチパチと火が移る音と馬の駆け¹¹²⁾る足音が似ていたためと思われる。

113) このような馬は頑強な駿馬と見なされていた。

114) 8行の訳注参照。

- 27- アルイード¹¹⁵⁾の雌ラクダは私を乗せて元気に歩む。軽快に進むが勇猛かつ果敢である。
- 28- 調教師がこれを調教した後は苦痛を和らげるために放免され、誰が訪ねてきても（肉がついて元気になるまで、人を乗せることもなくほって置かれる）。
- 29- この雌ラクダは9歳かさらに一年を重ねているが、仔を生んだことはなく、一滴の乳も搾られていない。
- 30- この雌ラクダは平地や火打石のまざった荒地の上に、いまだ、環状毛が抜けていない引きしまって硬い脚を置いて身を守る。
- 31- この雌ラクダは、水溜りや小川が干上がっているときに、ラウダート・アルカタ（山ウズラの牧場）¹¹⁶⁾を駆ける野生のロバのようによく駆ける。
- 32- わき腹がやせ細った雌ロバたちを率いる雄ロバは雌ロバの臀部を歯で押さえて噛み付く。
- 33- 雄ロバは草原にまかれた糞を踏みつけるが、やがて双子座の手による猛暑の日が、その血をかきたてる¹¹⁷⁾。
- 34- 激しい熱風で石ころの多い高原が燃えるとき、バッタは焦がされて（両脚で羽をこすり）騒音をたてる。
- 35- 雄ロバは高地の頂上に立ち尽くし熟考者の慎重さをおもわすように思案を続ける。
- 36- 即ち、雌ロバたちをスムナーンに連れて行って水を飲ませようか、それとも、ルガートの古井戸に行こうかと思うのである。
- 37- 雄ロバはたてがみを乱して、平原で草を食べている野獣を見つめている雌ロバに噛み付き、（平地に降りて行って草を食べようとするのを抑える）¹¹⁸⁾。
- 38- 私は賄賂を渡すことなく宮殿の門にしばしば入った。すると狭量ではない王は私に贈り物を授けてくれたものだ。
- 39- あなたは私を妬み憎んでいる者を多く見ることだろう。その憎む胸のなかでは怒りが燃えて傷をつけている。
- 40- 私はその怒りを彼の肋骨のなかに詰め込んでおく。すると、彼は、脚の静脈が曲がった雌羊のようによろけて歩く。
- 41- 彼は私に危害を加えなかったが、私は彼に苦いコロシントとアロエの汁で味付けした怒りのかたまりを飲み込ませた。

115) 最も優れたラクダはオマーンとハドラマウトの中間の Mahara（または Mahra）産のもので、これ al-ʿId はこの地域の部族名。ここから良質のラクダは mahri (pl. mahr) と呼ばれている。

116) Rawḍāt al-Qaṭā（または Rawḍ al-Qaṭā）という地名は数か所あって特定できない。

117) 糞が多いということは、草が夏風で枯れるまでには多く生えていたことを示すもので、野生のロバはこの草で養われる。熱気は双子座に由来されると見なされていたが、この時期、太陽が沈むと、ほとんど同時に双子座がのぼるからであろう。

118) 野生のロバは草原が枯れると四方が良く見える高所に上り、肉食獣や獵師を避ける。日没を待って水場へ降りてくる。雌ロバは他の動物が草を食べているのを見ると、少しでも草を食べようとして下へ下りたがるが、雄ロバは噛み付いたりしてこれを許さない。この個所には全速力で山を降りて水場へ向かうロバ、または、獵師に気づいて全速力で逃げるロバとラクダの脚の速さを比較する文言が脱落している可能性がある。

- 42- そのために、彼の胸の中の怒りは癒されることはない。それは血を噴出している血管の止血が出来ないのと同じである。
- 43- 王国の有力者の多くが私を脅迫したが、私が彼のところにつく前に警告せよとの知らせを受け、(事なきを得た)。
- 44- 彼は怒りにむせ、私に向けた両目を燃やしていた。まるで、豹が両目を発火させたようであった¹¹⁹⁾。
- 45- 彼は私のところに来る前に ―もつともそれは彼には出来ないことだが― カターダ木の強くて鋭いとげにさされるのを目の当たりにするだろう。
- 46- わたしはヒンデイフ¹²⁰⁾の純血を受け継ぐ者である。彼に由来する人々は善良で人数も多い。
- 47- 私は高貴な祖先を起源に持ち¹²¹⁾、今や一族の頭であり、ひとかどの地位を築いている。
- 48- 私は発火する火打石を持っている¹²²⁾。愚劣者の火打石は発火せず、目的を達しない。
- 49- 私は、人の行いが話題とされるなら、勇者に数えられ、数々の善行で話題とされる男である。
- 50- しかり、私は正当な権利は認め、これを否認することはない。私の犬は人懐こくて、噛み付いたりはしない。
- 51- 即ち、君は私の犬が人懐こいのを目の当たりにするだけだ。たとえ、案内人を伴わず夜間さまよっている旅人が来ても吼えたりはしない。
- 52- 多くの人がやってくるが彼は彼らを拒まない¹²³⁾。彼らの中には恩恵を求めて来る奴隷もいれば、自由人もいる。

(これより、元々別の詩であったものが始まる。57-61行は女性一般につき、次いで詩人が愛した女性について詠んでいる。)

- 53- あなたは住居跡を認めたのか。それとも、テイブラークとアバクッ¹²⁴⁾のごつごつした土地の間にあるそれを認めなかったのか。
- 54- 洪水は最初の奔流で住居跡を襲い、夜半と早朝の風がその跡形を消し去った。
- 55- (洪水と風は) 競い合うように夏の月々に住居跡を消しにかかり、ついに埃を巻き上げる風のために、そこは平らになってしまった。
- 56- あなたは住居跡が消されて書物に書かれた lām という文字のようになっているのを見るであろう¹²⁵⁾。

119) 豹の両目という表現は怒気を宿した目つきのこと。

120) Khidifはタミーム族の祖先をなす女性の名前。また彼女は同部族と連合していた Rihāb の祖先でもあるとされている。血統学者らは彼女は Muḍar の子'Alyās の妻 Laylā のあだ名だとしている。アルヤースは Ṭābikhā, 'Udd, Murr および Tamīm の父とされている。

121) al-nab'a 弓が作られる良材を得る樹のことで、出自の高貴さを譬えたもの。

122) 火を出す火打石とは、「望んだことがかなえられる」の譬え。後半はその逆の者。

123) fa-mā yu-nkirna-hum という読み方もなされていた。これなら、「犬は彼らを拒まない」となる。

124) 'Abaqurr は 'Abqar 即ち、ジンが住む架空の土地を表す詩語とされている。

125) wahy はコーランでは「啓示」の意味で用いられているが、ここでは「書き物」という古い意

- 57- 我々はその住居で、彫像のような¹²⁶⁾美女たちをおそらく見たことだろう。身震いするようなきびしい時世も彼女らの（裕福な）生活を脅かすことはなかった。
- 58- 彼女らは日が高くなる頃まで眠りを楽しむ¹²⁷⁾。彼女らは柔和と優しさに勝り、しとやかである。
- 59- 彼女らは歩幅短くゆっくりと歩み、空高く浮かぶ白雲のようにふっくらと肥っている。
- 60- 彼女らはヤマウズラのように小股で相互に訪問しあっている。そして、苦汁知らずの甘味で幸福な人生を満喫していた。
- 61- 彼女らは、非難する者が（私と）別れよ、と求めたのに従わなかった。非難した者は激しく罵ったかいがなかったために自殺せんばかりであった。
- 62- 私の心をすばらしさで満たし、恋焦がれているのは、ヴェールを巻いている最も美しい女性の姿である。
- 63- 真っ白な彼女の容色は私の心を驚かし、見る目を楽しませる。彼女の長く垂れ下がった髪も同様である。
- 64- 櫛は豊かな前髪の中に埋没し、彼女が長い髪を垂らすと、それは床の埃を払う。
- 65- 彼女の髪は大きな頭の上で色濃く巻いており、編み帯のように両側に別れて垂れている。
- 66- 彼女の額には純白が広がっており、他の女性よりも優れて気高い女性の一人である。
- 67- 彼女の目は、秋口に遅れた仔を持つために群れから離れて、浜藁やアカシアの枝先を食べようとしている母カモシカの目のようだ。
- 68- 彼女が笑うと両唇のあいだにカミツレの花のような白い歯並びが見える。歯茎にはアンチモニーが塗られ（歯の白さを際立たせ）¹²⁸⁾、歯先をとがらせている。
- 69- 仮にあなたが彼女の口を味わえば、冷たい雪を混ぜ合わせた蜂蜜の味かと思うであろう。
- 70- 彼女の頬は滑らかで美しく輝いており、首は長く、乳首は突起していて、いまだ垂れていない。
- 71- それは白カモシカの鼻のような形をしており、肉づきがよいふくよかな胸の中から肌着をぐっと突き上げている。
- 72- 彼女はすらりとしており、腰は細くくびれ、帯をしめるあたりは太っている。
- 73- 彼女の臀部は普段着を膨らませているが、まるで盛り上がった砂山が並んでい

味で使われている。lām というアラビア語の文字にふれているが、文字を知らなかった詩人が多かった時代の詩人の言としては、注目すべきものである。

126) mithl-a ad-dumā および ka-timthāl-i などという表現はイムルウルクイス以来の詩人らの常套句で、おそらく、シリアのギリシャ文化を通じて彫像を知っていたのであろう。

127) 女性が家事などにかかわらず遅くまで寝ているのは、裕福さを表す。イムルウ・ルクイスの *mu'allāqa* 37行、および本詩の85, 86行を参照。

128) 特に若い女性は歯の白さを際立たせるために歯茎にアンチモニーをぬる習慣があった。タラファの *mu'allāqa* 9行参照。なお、*ushur* とは、若さのしるしとして少年、少女が歯の先をとがらすこと。

るようだ。

74- 彼女が近所の女友達を訪ねようと歩み出ると、相手方に達する手前で息切れがする。

75- 即ち、彼女が進むと左右のもの内側が押し合い、根こそぎされたナツメヤシの樹が傾くように、よろめく¹²⁹⁾。

76- 故に、彼女は歩みよるときには両脚を広げる。彼女の体は大きく、(臀部は)太っていて重くゆれている。

77- 彼女の足首飾りのために70ミスカール¹³⁰⁾の銀が溶かされるが、その飾りを強いてはめようとすると(脚が太っているために)壊れてしまう。

78- 誠実憐み深い母が彼女をいつくしみ、慈愛厚い乳を彼女に惜しみなく与えた。

79- 彼女は恵まれた生活を享受しており、その人生は涼やかで、深窓にはぐくまれている。

80- 彼女が歩むときには脚が地面にじかに触れるようなことはない。地面には埃がつかないように敷物が敷かれているからだ。

81- 彼女は絹(の衣装)を踏んで歩むが、絹を何ほどのものとも思っていない。その裾を長くひきずって歩む。

82- あなたは貴重なアマ布も彼女にとっては単なる普段着用で、彼女はこれをつぎつぎに下着に仕立てて着てしまうのを見るであろう。

83- ついで、彼女は絨毯の上に崩れるが、それは砂山が穴を掘られて崩れる姿に似ている。

84- 竜涎香と麝香の香りが彼女から漂い、その肌はナツメヤシの枝の房のように黄色い¹³¹⁾。

85- 日が沈みかけるたそがれ時、彼女は睡魔に襲われる¹³²⁾。それは、酒に酔ったように彼女をとらえるうたた寝である。

86- 午前中の熱気¹³³⁾が彼女を打ち負かし、野生の子牛が寒い日にこごえて立ち上がれないように、彼女は動けない。

87- 彼女の袖口から麝香が搾りだされると¹³⁴⁾、彼女自身がほとんど搾り出されるであろう。

88- 彼女は見事な肉体をそなえており、胸の上の真珠の首飾り2本と腕輪を残して、裸にすれば、

129) コーラン54:20「その風は人間を根こそぎされたナツメヤシの切り株のようにもぎとった。」

75行と76行は一对のもので、*munkaʿir*(根こそぎされた)はコーランの文句と重なる。

130) ミスカールは重量単位でエジプトでは1ミスカールは4.68g。

131) サフランの花を肌にこすりつける風習があった。注釈では「香料を多く用いるので肌が黄色になった」とある。

132) 「彼女は夜更かしをせず良く眠った」の意。

133) *waqdat-u-hā*(午前中の熱気)となっているが、別の伝承では、*raqdat-u-hā*(午前中の眠り)とある。58行と照らしてみると、こちらのほうが優雅な生活をしている女性にはふさわしいと思われる。暑さの盛りは午後三時ごろであるから、午前中としているのはちぐはぐだ。

134) 彼女は体全体が麝香だと言っており、84行の後に置かれるべきではないか。

- 89- あなたは、きっと彼女の肉体を、ガウンのなかから白い雲が払われて現れた日輪だ、と思うであろう。
- 90- 太陽が沈むときも、のぼるときも、常にその姿は彼女の姿の生き写しである。
- 91- 彼女は、私が生死の間をさまよっているとき私を捨てた。死んで、墓に埋められ、休息の時を迎えた者のような死に見舞われる前に私から去った。
- 92- 人々は尋ねる、“彼は熱病にかかっているのか、それとも、隠そうと苦勞しているが肺結核に冒されているのか”と。
- 93- 彼女こそ私の病（のもと）だ。これを癒すのは彼女次第だ。だが、彼女にはこれを拒み、治すのは先送りされ、困難なことだ。
- 94- （私が死に）私の兄が、たとえ、その復讐として彼女を殺したところで、殺害者を求める復讐者が（私の兄弟を）捕えて成敗するであろう¹³⁵⁾。
- 95- 私は、数珠かけ鳩の雌が雄を呼び掛けて鳴く限りは¹³⁶⁾、何時までも、彼女のことを忘れない。

135) 彼女への愛ゆえに私が死ねば、私の兄弟には彼女を殺して復讐する義務が生じる。すると彼女を殺したかどで、私の兄弟は復讐をうけることになる。誇張表現とみられる。

136) 数珠かけ鳩の雌は qumrīya、雄は sāq ḥurr。雌が雄に呼びかける鳴き声は恋人の苦悩を掻き立てるとされている。

— (XVII) アルムザッリド —

まえがき

この詩人は、すでに本詩集 XV で紹介した。多くの者はこの詩は詩人の兄弟 Jaz' b. Ḍirār の作だと伝えている。愛の序詩に次いで多くの事柄について詠んでいるが、特に主題としているものはない。すなわち、1-11行は愛の序詩、12-27行は戦場と雄馬、28-37行は戦場と雌馬、38-41行は鎖帷子、42-43行は兜、44行は楯、44-49行は剣、50-53行は槍、53-63行は敵を風刺、64-74行は悲慘な獵師と無知な妻、などについて語っている。ṭawīl 調、74行。

(XVII) テキスト

وَقَالَ الْمُزَرَّدُ أَخُو الشَّمَاخِ

- | | |
|---|--|
| وَمَا كَادَ لَأَيَّا حُبِّ سَلَمَى يُزَايِلُ | ١- صَحَا الْقَلْبُ عَنْ سَلَمَى وَمَلَّ الْعَوَاذِلُ |
| وَحَتَّى عَلَا وَخَطَّ مِنَ الشَّيْبِ شَامِلُ | ٢- فُؤَادِي حَتَّى طَارَ غَيُّ شَيْبَتِي |
| شَكِيرٌ كَأَطْرَافِ الثَّغَامَةِ نَاصِلُ | ٣- يُقَنِّنُهُ مَاءُ الْيُرْنَاءِ تَحْتَهُ |
| مَتَى يَأْتِ لَا تُحَجِّبَ عَلَيْهِ الْمَدَاخِلُ | ٤- فَلَا مَرْحَبًا بِالشَّيْبِ مِنْ وَفْدِ زَائِرٍ |
| أَخُو ثِقَةٍ فِي الدَّهْرِ إِذْ أَنَا جَاهِلُ | ٥- وَسُقْيَا لِرِيْعَانِ الشَّبَابِ فَإِنَّهُ |
| لِطَالِبِهَا مَسْئُولُ خَيْرٍ فَبَاذِلُ | ٦- وَالْهُوَ بِسَلَمَى وَهَى لَذَّ حَدِيثُهَا |
| وَلَهُوَ لِمَنْ يَرْتُو إِلَى اللَّهِوَ شَاغِلُ | ٧- وَبَيْضَاءُ فِيهَا لِلْمُخَالِمِ صَبْوَةٌ |
| وَمَشَى خَزِيلِ الرَّجْعِ فِيهِ تَفَاتِلُ | ٨- لِيَالِي إِذْ تُصْبِي الْحَلِيمَ بِدَلْهَا |
| رِيَاضُ سَرَتْ فِيهَا الْغُيُوثُ الْهَوَاطِلُ | ٩- وَعَيْنِي مَهَاةٍ فِي صَوَارٍ مَرَادُهَا |
| أَسَاوِدُ رَمَانَ السَّبَاطِ الْأَطَاوِلُ | ١٠- وَأَسْحَمَ رِيَّانِ الْقُرُونِ كَأَنَّهُ |
| نَمِيرُ الْمِيَاهِ وَالْعُيُونُ الْغَلَاغِلُ | ١١- وَتَخْطُو عَلَى بَرْدِيَّتَيْنِ غَذَاهُمَا |
| إِذَا كَشَرَتْ عَنْ نَابِهَا الْحَرْبُ حَامِلُ | ١٢- فَمَنْ يَكُ مِعْزَالِ الْيَدَيْنِ مَكَانُهُ |
| أَنَا الْفَارِسُ الْحَامِي الذَّمَّارُ الْمُقَاتِلُ | ١٣- فَقَدْ عَلِمْتُ فِتْيَانُ دُبْيَانَ أَنْبَى |
| وَأَرْجَعُ رُمْحِي وَهُوَ رِيَّانُ نَاهِلُ | ١٤- وَأَنْتَى أَرْدُ الْكَبْشِ وَالْكَبْشُ جَامِعُ |
| وَأَبْدَتْ هَوَادِيهَا الْخُطُوبُ الرَّلَازِلُ | ١٥- وَعِنْدِي إِذَا الْحَرْبُ الْعَوَانُ تَلَفَّحَتْ |

- ١٦- طُوالُ القَرَا قَدْ كَادَ يَذْهَبُ كَاهِلًا جَوَادُ الْمَدَى وَالْعَقَبِ وَالْخَلْقُ كَامِلُ
 ١٧- أَجَشُّ صَرِيحِي كَانَ صَهِيلَهُ مَزَامِيرُ شَرِبَ جَاوَبَتْهَا جَلَا جِلُ
 ١٨- مَتَى يُرْ مَرْكُوبًا يُقَلُّ بَازُ قَانِصِي وَفِي مَشْيِهِ عِنْدَ الْقِيَادِ تَسَاتِلُ
 ١٩- تَقُولُ إِذَا أَبْصَرْتَهُ وَهُوَ صَائِمٌ خِبَاءَ عَلَى نَشْرِ أَوْ السَّيْدِ مَائِلُ
 ٢٠- خَرُوجُ أَصَامِيمٍ وَأَخْصَنُ مَعْقِلٍ إِذَا لَمْ تَكُنْ إِلَّا الْجِيَادَ مَعَايِلُ
 ٢١- مُبَرِّزُ غَايَاتٍ وَإِنْ يَتَلَّ عَانَةً يَذَرُهَا كَذَوْدٍ عَاتٍ فِيهَا مُخَايِلُ
 ٢٢- يُرَى طَامِخَ الْعَيْنَيْنِ يَرْتَوُ كَانَهُ مُوَانِسُ دُعْرِ فَهُوَ بِالْأَذْنِ خَاتِلُ
 ٢٣- إِذَا الْخَيْلُ مِنْ غَبِّ الْوَجِيفِ رَأَيْتَهَا وَأَعْيُنُهَا مِثْلُ الْقِلَاتِ حَوَايِلُ
 ٢٤- وَقَلَقَلْتُهُ حَتَّى كَانَ ضُلُوعُهُ سَفِيفُ حَصِيرٍ فَرَجَحْتُهُ الرِّوَامِلُ
 ٢٥- يَرَى الشَّدَّ وَالْتَقَرِيبَ نَذْرًا إِذَا عَدَا وَقَدْ لَحِقَتْ بِالصُّلْبِ مِنْهُ الشَّوَاكِلُ
 ٢٦- لَهُ طَحَرٌ عَوْجٌ كَانَ مُضِيفُهَا قِدَاحٌ بَرَاهَا صَانِعُ الْكَفِّ نَابِلُ
 ٢٧- وَصُمُّ الْحَوَامِي مَا يُبَالِي إِذَا جَرَى أَوْعَتْ نَقًا عَنَّتْ لَهُ أَمْ جَنَادِلُ
 ٢٨- وَسَلْهَبَةٌ جَرْدَاءُ بَاقِي مَرِيسُهَا مُوثَّقَةٌ مِثْلُ الْهَرَاوَةِ حَائِلُ
 ٢٩- كَمِيتٌ عَبْنَاءُ السَّرَاقَةِ نَمَى بِهَا إِلَى نَسَبِ الْخَيْلِ الصَّرِيحِ وَجَافِلُ
 ٣٠- مِنَ الْمُسَبْطَرَاتِ الْجِيَادِ طِمْرَةٌ لَجُوجٌ هَوَاهَا السَّبَسَبُ الْمُتَمَاجِلُ
 ٣١- صَفُوحٌ بِخَدَّيْهَا وَقَدْ طَالَ جَرِيُهَا كَمَا قَلَبَ الْكَفِّ الْأَلَدُ الْمُجَادِلُ
 ٣٢- يُفَرِّطُهَا عَنْ كَبَّةِ الْخَيْلِ مَصْدَقُ كَرِيمٌ وَشَدُّ لَيْسَ فِيهِ تَخَاذُلُ
 ٣٣- وَإِنْ رُدَّ مِنْ فَضْلِ الْعِنَانِ تَوَرَّدَتْ هَوِيٌّ قَطَاةٌ أَتْبَعَتْهَا الْأَجَادِلُ
 ٣٤- مُقَرَّبَةٌ لَمْ تُفْتَعَدْ غَيْرَ غَارَةٍ وَلَمْ تَمْتَرِ الْأَطْبَاءُ مِنْهَا السَّلَائِلُ
 ٣٥- إِذَا ضَمُرَتْ كَانَتْ جِدَايَةً حُلْبٍ أُمِرْتُ أَعَالِيهَا وَشَدُّ الْأَسَافِلُ
 ٣٦- وَقَدْ أَصْبَحَتْ عِنْدِي تِلَادًا عَقِيلَةً وَمِنْ كُلِّ مَالٍ مُثَلَّدَاتٍ عَقَائِلُ
 ٣٧- وَأَحْسِسُهَا مَا دَامَ لِلزَّيْتِ عَاصِرٌ وَمَا طَافَ فَوْقَ الْأَرْضِ حَافٍ وَنَاعِلُ
 ٣٨- وَمَسْفُوحَةٌ فَضْفَاضَةٌ تُبْعِيَّةٌ وَأَهَا الْقَتِيرُ تَجْتَوِيهَا الْمَعَابِلُ
 ٣٩- دِلَاصٌ كَظْهَرِ الثَّوْنِ لَا يَسْتَطِيعُهَا سِنَانٌ وَلَا تِلْكَ الْحِطَّاءُ الدَّوَاحِلُ
 ٤٠- مُوشَحَةٌ بَيْضَاءُ دَانٍ حَيِّكُهَا لَهَا حَلَقٌ بَعْدَ الْأَنَامِلِ فَاضِلُ

- ٤١- مُشَهَّرَةٌ تُحْنَى الْأَصَابِعُ نَحْوَهَا
 ٤٢- وَتَسْبِغَةٌ فِي تَرْكَةِ حِمِيرِيَّةٍ
 ٤٣- كَانَ شَمَاعَ الشَّمْسِ فِي حَجَرَاتِهَا
 ٤٤- وَجُوبٌ يُرَى كَالشَّمْسِ فِي طَخِيَةِ الدُّجَى
 ٤٥- سَلَفٌ حَدِيدٌ مَا يَزَالُ حُسَامُهُ
 ٤٦- وَأَمْلَسُ هِنْدِيٍّ مَتَى يَعْلُ حَدُّهُ
 ٤٧- إِذَا مَا عَدَا الْعَادَى بِهِ نَحْوَ قِرْنِهِ
 ٤٨- أَلَسْتَ نَقِيًّا مَا تَلِيْقُ بِكَ الذَّرَى
 ٤٩- حُسَامٌ خَفِيٌّ الْجَرَسِ عِنْدَ اسْتِلَالِهِ
 ٥٠- وَمُطَرِّدٌ لَدُنْ الْكُعُوبِ كَأَنَّمَا
 ٥١- أَصَمُّ إِذَا مَا هُرَّ مَارَتْ سَرَاتُهُ
 ٥٢- لَهُ فَارِطٌ مَاضِي الْغَرَارِ كَأَنَّهُ
 ٥٣- فَدَعُ ذَا وَلَكِنْ مَا تَرَى رَأَى غُصْبَةٍ
 ٥٤- يَهْزُونُ عِرْضِي بِالْمَغِيبِ وَدُونَهُ
 ٥٥- عَلَى جَيْنٍ أَنْ جُرْتُ وَأَشْتَدَّ جَانِبِي
 ٥٦- وَجَاوَزْتُ رَأْسَ الْأَرْبَعِينَ فَأَصْبَحْتُ
 ٥٧- فَقَدْ عَلِمُوا فِي سَالِفِ الدَّهْرِ أَنَّي
 ٥٨- زَعِيمٌ لِمَنْ قَادَفْتُهُ بِأَوَابِدِ
 ٥٩- مُذَكَّرَةٍ تُلْقَى كَثِيرًا رَوَاتُهَا
 ٦٠- تُكْرُ فَلَا تَزْدَادُ إِلَّا اسْتِنَارَةً
 ٦١- فَمَنْ أَرَمِهِ مِنْهَا بَبِيْتٍ يُلْحَ بِهِ
 ٦٢- كَذَلِكَ جَزَائِي فِي الْهَدْيِ وَإِنْ أَقْلُ
 ٦٣- فَعَدَّ قَرِيضَ الشَّعْرِ إِنْ كُنْتُ مُعْزِرًا
 ٦٤- لِنَعْتِ صُبَاحِي طَوِيلٍ شَقَاؤُهُ
 ٦٥- بَقِيْنَ لَهُ مِمَّا يُبْرَى وَأَكْلُبُ
- إِذَا جُمِعَتْ يَوْمَ الْحِفَاطِ الْقَبَائِلُ
 دَلَامِصَةٌ تَرْفُضُ عَنْهَا الْجَنَادِلُ
 مَصَابِيحُ رُهْبَانٍ زَهَتْهَا الْقَنَادِلُ
 وَأَبْيَضُ مَاضٍ فِي الصَّرِيَّةِ قَاصِلُ
 ذَلِيْقًا وَقَدْتُهُ الْقُرُونُ الْأَوَائِلُ
 ذُرَى الْبَيْضِ لَا تَسْلَمُ عَلَيْهِ الْكَوَاهِلُ
 وَقَدْ سَامَهُ قَوْلًا فَدَتَكَ الْمَنَاصِلُ
 وَلَا أَنْتَ إِنْ طَالَتْ بِكَ الْكَفْ نَاكِيلُ
 صَفِيْحَتُهُ مِمَّا تَنْقَى الصَّيَاقِلُ
 تَغَشَّاهُ مُنْبَاعٌ مِنَ الرِّيتِ سَائِلُ
 كَمَا مَارَ ثُعْبَانُ الرِّمَالِ الْمُوَائِلُ
 هِلَالٌ بَدَا فِي ظُلْمَةِ اللَّيْلِ نَاجِلُ
 أَتَنِي مِنْهُمْ مُنْدِيَاتٌ عَضَائِلُ
 لِقَرْمِهِمْ مَنْدُوحَةٌ وَمَآكِيلُ
 وَأُنْبَحَ مِنِّي رَهْبَةً مَنْ أَنْاضِلُ
 قَنَاتِي لَا يُلْقَى لَهَا الدَّهْرُ عَادِلُ
 مَعْنٌ إِذَا جَدَّ الْجِرَاءُ وَنَابِلُ
 يُعْنَى بِهَا السَّارَى وَتُحْدَى الرُّوَاجِلُ
 ضَوَاحٍ لَهَا فِي كُلِّ أَرْضٍ أَرَامِلُ
 إِذَا رَاَزَتِ الشَّعْرَ الشَّفَاهُ الْعَوَامِلُ
 كَشَامَةٌ وَجْهِ لَيْسَ لِلشَّامِ غَاسِلُ
 فَلَا الْبَحْرُ مَنْرُوحٌ وَلَا الصَّوْتُ صَاجِلُ
 فَإِنَّ غَرِيرَ الشَّعْرِ مَا شَاءَ قَائِلُ
 لَهُ رَقَمِيَّاتٌ وَصَفَرَاءُ ذَابِلُ
 تَقْلَقُلُ فِي أَعْنَاقِهِنَّ السَّلَاسِلُ

- 66 سُحَامٌ وَمِقْلَاءُ الْقَنِيصِ وَسَلَهَبٌ وَجَدَلَاءُ وَالسَّرْحَانُ وَالْمُتَسَاوِلُ
 -67 بَنَاتٌ سُلُوقِيَّيْنِ كَانَا حَيَاتُهُ فَمَاتَا فَأَوْدَى شَخْصُهُ فَهُوَ خَامِلُ
 -68 وَأَيُّقَنَ إِذْ مَاتَا بِجُوعٍ وَخَبِيَّةٍ وَقَالَ لَهُ الشَّيْطَانُ إِنَّكَ عَائِلُ
 -69 فَطَوَّفَ فِي أَصْحَابِهِ يَسْتَثْبِيهِمْ فَأَبَ وَقَدْ أَكَدْتَ عَلَيْهِ الْمَسَائِلُ
 -70 إِلَى صَبِيَّةٍ مِثْلِ الْمَغَالِي وَخِرْمِلِ رَوَادٍ وَمِنْ شَرِّ النِّسَاءِ الْخَرَامِلُ
 -71 فَقَالَ لَهَا هَلْ مِنْ طَعَامٍ فَإِنِّي أَدُمُّ إِلَيْكَ النَّاسَ أُمُّكَ هَابِلُ
 -72 فَقَالَتْ نَعَمْ هَذَا الطَّوِيُّ وَمَاؤُهُ وَمُحْتَرَقٌ مِنْ حَائِلِ الْجِلْدِ قَاحِلُ
 -73 فَلَمَّا تَنَاهَتْ نَفْسُهُ مِنْ طَعَامِهِ وَأَمْسَى طَلِيحًا مَا يُعَانِيهِ بَاطِلُ
 -74 تَغَشَّى يُرِيدُ النَّوْمَ فَضَلَ رِدَائِهِ فَأَعْيَا عَلَى الْعَيْنِ الرُّقَادَ الْبَلَابِلُ

(XVII) 訳

- 1- 私の心はサルマー¹³⁷⁾への恋からさめた。咎めだてする女たちも非難するのに飽きた。だが、サルマーへの恋心が消えるのは遅々として、なかなか去らなかった。
- 2- 青春の迷いがようやく私の心から飛び去ったが、それは白髪が頭全体に広がるころになってからである。
- 3- ヒンナー¹³⁸⁾の汁で白髪を赤く染めるが、その下にはサガームの綿毛のような短くて白い毛が生えている。
- 4- 白髪は歓迎しない。それはやがて訪れる死を先触れする使節だ。この訪問者¹³⁹⁾が来れば門がふさがれるすべはない。
- 5- 青春の初期に神が恵みの雨を降らせたまえ。青春は私が愚かであった頃の時世の親友であった。
- 6- 私がサルマーと戯れるとき、彼女の語りは彼女を求める者にとって、なんと甘美なものよ。彼女は良いものを求められると惜しみなく与える。
- 7- 彼女の肌は白く、女性と楽しく語る男たちとは子供のように付き合い、戯れに目を向けるとこれに心を奪われる者を楽しませてくれる。
- 8- 彼女は、幾夜、沈着な男を、優美な眉態となよなよともつれそうな歩みで魅惑したことだろう。
- 9- また、彼女の牝牛のような大きな目で（魅惑した）。それは昨夜、豪雨が降り注いだ草原で草を食べた牝牛の目である。

137) 女性の名前は XV の詩と同様 Salmā とあるが、Rayyā だとする説もある。

138) al-yurannā' は al-ḥinnā' のことで、頭髮や顎鬚などを赤く染めるのに用いられた。ここでは産毛状の短い肌毛が良く染まらず、白かったと言っている。al-thaghāma とは、ヒソップのことで、乾燥すると白くなる植物。

139) zā'ir (訪問者) とは「死」のこと。

- 10- 彼女の垂れ下がった漆黒の髪房で魅惑した。それは、まるで、ランマーンの黒蛇のようにしなやかで長い。
- 11- 彼女は（白くて清らかですらりとした）パピルスの茎のような足¹⁴⁰⁾で歩む。それを育てたのは新鮮な水と木々の間に流れ出る泉である。
- 12- 戦争が牙をむくとき、一体誰が両手に武器を持たないであろうか。（武器を持たない者）には戦場で名を上げる場所がない。
- 13- ズブヤーン族の若者達は私が神聖な一族を守る騎士であり、名だたる戦士であることを知っている。
- 14- 私は頑強な敵の首領を撃退する。そして、盛んに血を飲み、さらに、飲みたがる槍を持って戦場から帰る。
- 15- 戦争で激闘が相次ぎ、激震のような事件で戦争前期の様相を表すとき、私には、
- 16- 背中の長い馬の用意がある。その背はほとんど首の付け根まで伸び、目標目指して走りに走る駿馬で、完全な体形をそなえている。
- 17- この馬の鳴き声は高く震えていて¹⁴¹⁾、純粋なサリーフ種の血統を引き、そのいかなきは酒を飲む者たちの葦笛の音のようで、（それに、馬の首にかけた）鈴が答えている。
- 18- この馬に騎手が乗っている姿を見ると、人々はタカ匠のタカだ、という。手綱が引かれると順序正しく歩む。
- 19- 馬の立ち姿を見ると、あなたは高台に立っている仮小屋¹⁴²⁾か、または、オオカミが立ってあたりを睥睨しているようだ、と言うであろう。
- 20- この馬は馬の集団の外に身を置き避難所を安全に守っている。駿馬によってのみ安全な避難場所が作られる。
- 21- この馬は目標に向かって駆け抜ける。気前よさを競う男が人々をもてなすために、次々と雌ラクダを屠殺するように、雌ロバたちを殺傷する¹⁴³⁾。
- 22- 馬が両目を上に向けて、じっと見つめている姿は、何がしかの恐怖を感知して、耳でその正体を聞き取ろうと構えているためである。
- 23- あなたが、急ぎ足での長旅をして一日経った他の馬を見れば、その目は山水が溜まるくぼ地のようにくぼんでいるのに気づくであろう。（だが、私の馬は違う）。
- 24- 私は馬を激しく走らせて鍛えた。ために、肉がそげ、肋骨は織女が椰子の葉を隙間をあけて並べて編んだ敷物の組み紐のようになった。
- 25- この馬は走るとなれば、早駆けも、小走りも義務と見なしている。すでに、激しい訓練のために脇腹は背骨にくっついていて。
- 26- 馬の肋骨は曲がっていてそこに残っている肉は、手先の器用な矢作り職人が作

140) 女性の足をパピルスに譬える例はイムルウ・ル・カイスの *muʿallaqa* 36行に見られる。

141) アラブはいかなきが声高で、明瞭な馬を良とした。そのような声を *jushsha* と言った。

142) *khibā*（仮小屋）の代わりに、*khayāl*（幻影）という読みもある。馬がテントの骨組みのような姿に見えと言ったもの。

143) *dhawd* は3-10頭の雌ラクダの群れ。*mukhāyil* は気前のよさをことさらに言い立てる男のことで、客をもてなすために次々とラクダを殺す者。

った占い矢のようだ。

- 27- 馬の蹄の縁は硬く駆けるにあたり前方に現れるのが砂地であろうが石が多い荒地であろうが、全く気にしない。
- 28- (また、私は) 長い体形の雌馬をもっているが、毛は短く精力は尽きず、引き締まった体軀は枝のようで、いまだ子を孕んでいない。
- 29- それは栗毛の馬で、背筋は頑強で、種馬アッサリーフとジャーフィルがこの馬の血統を高めている。
- 30- それは四肢を広げて走る駿馬の血筋につながっており、軽々と跳ね、出走をしつこく求める。この馬が好むところは果てしなく広大な砂漠である。
- 31- 馬は長軀した後も両頬を左右に向ける¹⁴⁴⁾。まるで、敵意を抱く論争屋が手を変え品を変えるように、(活発に動こうとする)。
- 32- 立派な忍耐力と疲れを知らぬ強烈な攻撃力をそなえているために、この馬は自ずと突進する馬群の先頭に立たされる。
- 33- 手綱が返されると馬はタカに追われるヤマウズラが全速力で逃げるような速さで駆ける。
- 34- この馬は住まいの近くで大切に扱われ、勝手に出歩くことはない。また、略奪行以外で人を乗せることもない。子馬がその乳首から乳を吸ったこともない¹⁴⁵⁾。
- 35- 調教を受けて細身になると、フッラブを食べて育った若いガゼルのように。すなわち、上体の筋肉は強くより合わされ、これを支える四肢は贅肉が取れて軽快になる。
- 36- この馬はわれらの住まいで生まれ育った貴重な財宝になった。あらゆる財産の中で生まれ育ったものが最高の財産である。
- 37- 私はこの雌馬をオリーブ油のためには圧搾機がある限り¹⁴⁶⁾、また、素足かサンダルを履いて人が地上を巡り歩く限り、手元に置き、決して手放さない。
- 38- (また私は) トッパ製¹⁴⁷⁾のゆったりとした鎧をもっている。それは鋌でしっかりと組み合わさっており、幅広の長い矢じりも貫通することが出来ない。
- 39- 磨かれて輝く鎧は魚の背のようで、槍の穂先も役立たず、ましてや、貫通をねらう小型の矢も用をなさない。
- 40- 鎧は白色であるが、(銅の) 縞模様がついており、金属片の並びは接近している。また、袖口には指先まで覆う環がついている。
- 41- この鎧の名声は広く行き渡り、防衛のため諸部族が集められる日、人々はこの鎧のほうを指差す。
- 42- (また、私は) 太陽できらめくヒムヤル製の兜から垂れてくびを覆う鎖帷子を

144) 長軀して汗を流してもなお挫けない馬の表現は、本詩集 VI の Salama の詩5行目の表現と同じものである。

145) 子を生んでいないことは、馬の頑強さを示す。

146) オリーブ油の圧搾機がある限りという表現は、「何時までも」の意味で用いられているが、ベドウィン詩人の言葉としては少し違和感がある。おそらく、シリアあたりで見聞したものであろう。

147) 「トッパ製」：本詩集 X, 35行の註で説明した。

持っている。それは当たる石を砕いて飛散させるほどの丈夫なものである。

- 43- 兜の側面に当たる日差しの輝きはまるで（旅人を導くために）燭台に火をつけて光を放つキリスト教徒の修道僧のランプのようである¹⁴⁸⁾。
- 44- （また、私は）戦塵による暗闇のなかでも太陽のように輝いて見える楯と、敵を一刀両断する鋭利な剣を持っている。
- 45- この剣は最上の鉄で作られており、その刃は依然として鋭利である。先人らもこの剣を手本にして剣を作ったのである。
- 46- それは光沢のあるインド鉄で作られており、その刃が兜の頂上に切り下ろされると下の肩は無事では済まされない。
- 47- この剣をかざして敵に突進するときには、あらかじめ剣に向かって“すべての剣はそちの犠牲になれ。”と告げていた。
- 48- “そちは純粋な鉄ではないのか。鉄兜の頂上もそちにはかなわず裂かれる。そちを長時間手で握っていてもそちは衰えない。”
- 49- 鞘をはらうときこの剣は音をたてない名刀で、その表面は砥ぎ師が磨き上げ錆びひとつない。
- 50- （また、私は）しなやかで結節点が柔らかな槍を持っている。その槍は絶え間なく流れ出る油が覆っている。
- 51- 強固な槍であるが、しごかれれば先端部分は隠れ家へと急ぐ砂漠の蛇のようにたわむ。
- 52- 槍の先端には鋭い刃がついているが、それは暗夜に現れる新月のように細い。
- 53- それはさておき、あなたは恥知らずな暴言を私に加えた集団の考えをどの様に思われるか。
- 54- 彼らは陰口でもって私の名誉を疵付けているが、（そのような無益なことはやめるがよい）。私の名誉を食いちぎるのは（彼らに出来ることではない）。彼らは食が細く、私の名誉（のような食べがたいものをかじるのは無理である）。彼らには他の食べやすい物が多々ある¹⁴⁹⁾。
- 55- 私は試練を受けている時に（挑戦を受けた）。私が脇を固めると、争う相手は慄きの声をあげた。
- 56- 私は40歳代の初めを越えたが、私の槍には絶えて匹敵する相手が見出せない。
- 57- 彼らはずっと前から、私が論争が激しくなると、巧みな調停者であることを知っている。
- 58- 私は私が衝撃的な言葉で罵倒した者に保証する。すなわち、夜旅する者はその言葉を歌い、ラクダ隊はその言葉で駆り立てられると¹⁵⁰⁾。

148) キリスト教徒修道僧は旅人の道標になるように、夜ランプに火を灯す者として古詩に登場する。イムルウ・ル・カイスの *mu'allaga* 72行。

149) この一行は意識した。

150) 58行から61行までは、詩人の作品がどの様に伝えられたのかがよくうかがえる。夜旅するのは気を紛らわすために、ラクダの御者はラクダを進めるために、水運び人は作業中に詩人の風刺詩を歌い広めた。

- 59- 私の言葉はよく記憶されていて、多くの語り手たちに伝えられ、これを語る彼らの声は日の当たるあらゆるところにラクダ隊により届けられる。
- 60- 語り手の唇が私の詩を試し詠みするとき、人々はこれを繰り返し歌い、一段と輝きを増す。
- 61- 私が詩の一行で風刺した者は顔にほくろを付けられたように人目にさらされる。このほくろは洗い流すことが出来ないからだ。
- 62- 私への贈り物に対して私が報いるところはこのようなものである。わたしが一度語れば、海ほどの（言葉を持っているので）、言葉は尽きず、声はしわがれない。
- 63- よって、君はたとえ多弁であっても、詩を詠むのは断念するが良い。なぜなら、詩才豊かな詩人は思いのままの詩を詠むからだ。
- 64- スバーフ族の男¹⁵¹⁾には苦難の日々が長く続き、ラクム製の矢と（ナブウの木を）良く乾かして作られた黄色の弓をもっていたと述べられている。
- 65- 彼がナイフで作ったこれらの物品は残っている。加えて、何匹かの犬がいるがその首の首飾りは揺れている。
- 66- （これらの犬のあだ名は）スハーム（黒犬）、ミクラウ・アルカニース（獵師が使う両端が尖った木片）、サルハブ（長身）、ジャドラーウ（すらりとした）、アッシルハーン（オオカミ）およびアルムタナーウィル（つかみや）である。
- 67- これらの犬はいずれも二匹のサルキーヤ犬の子である。親犬のつがいは彼のために生涯狩りをして死に、彼は見捨てられ、落ちぶれた。
- 68- 二匹の犬が死んだとき、彼は飢えに襲われ、希望を失った。すると、サタン¹⁵²⁾が“お前は家族を養わねばならない。”と告げた。
- 69- そこで、彼は仲間の間を巡り、支援を求めたが、要請には応えてもらえなかった。
- 70- 穂先のない役立たずの矢のように痩せこけた彼の子供たちや、出歩きまわる狂った女房のためにしたことである。最悪の妻とは分別を失った女のことである。
- 71- 彼は女房に“なにか食べるものはないのか。”と尋ねた。というのは、私はそなたのために、人々を非難するほかないからだ。お前の母は子を失えばよい。
- 72- 彼女は“はい、この井戸とその中の水と一年経った、しなびて乾ききった皮が少々あります。”と答えた。
- 73- 彼は（彼女が作った粗末な）料理を食べ終わると、（空腹にさいなまれ）夕方の楽しみ事も忘れて疲れのあまり横になってしまった。
- 74- 彼は、上着の裾を掛けて眠りたかったが、不安な胸騒ぎに妨げられて、目を眠らせることが出来なかった。

151) Šubāh は Dabba 族の男とか、獵師と言われている。al-Raqam は矢を作る職人の名前、または矢を産する土地名。弓がナブウの木を良材としたことは本詩集 XVI の47行で説明したとおり。この行以下最後までは惨めな獵師の生活が語られる。

152) al-shaytān は悪魔ではなく、彼の精神または靈感を指すものと考えられる。

〔主な参考資料〕

- Ibn Qutayba, *Kitāb al-Shiʿr wa al-Shuʿarāʾ*, ed. De Goeje, Leiden, 1904.
- al-ʿIṣbahānī, ʿAbū al-Faraj, *Kitāb al-ʿAghānī*. 25 vols. ed. ʿAbd al-Sattār ʿAḥmad Farrāj, Beirut, 1955-61.
- Shākir, A.A. & M.ʿA. Hārūn (eds), *al-Mufaḍḍalīyāt*, Cairo, 1942, 3rd edn., 1964.
- Lyall, C.J., *The Mufaḍḍalīyāt: An Anthology of Ancient Arabian Odes Compiled by al-Mufaḍḍal Son of Muḥammad according to the Recension and with the Commentary of Abū Muḥammad al-Qāsim ibn Muḥammad al-Anbārī*, 2 vols, Oxford, 1921.
- al-Marzūqī, *Sharḥ Dīwān al-Ḥamāsa*, A. ʿAmīn & M.ʿA. Hārūn (eds), 4 vols, Cairo, 1967.
- ʿIbrāhīm, M.A., *ʿAyyām al-ʿArab fī al-Jāhiliyya*, Cairo, 1961.
- 池田修 2003 「アルムアッラカート試訳 (I) : イムルウルカイス」『関西アラブ・イスラム研究』3, pp.1-13.
- 池田修 2004 「アルムアッラカート試訳 (II) : タラファ」『関西アラブ・イスラム研究』4, pp.1-16.
- 池田修 2006 「アルムアッラカート試訳 (III) : ズハイル」『アラブ・イスラム研究』5, pp.11-19.
- 池田修 2006 「アルムアッラカート試訳 (IV) : アンタラ」『アラブ・イスラム研究』5, pp.21-30.
- 池田修 2008 「アルムアッラカート試訳 (V) : ヒッリザ」『アラブ・イスラム研究』6, pp.1-13.
- 池田修 2008 「アルムアッラカート試訳 (VI) : ラビード」『アラブ・イスラム研究』6, pp.15-27.
- 池田修 2009 「アルムアッラカート試訳 (VII) : アムル・ブヌ・クルスウム」『アラブ・イスラム研究』7, pp.1-13.
- 池田修 2009 「アルムアッラカート試訳のあとがき」『アラブ・イスラム研究』7, pp.15-21.
- 池田修 2009 「アルムファッダリーヤート試訳 (I) タアッバタ・シャッラン」『アラブ・イスラム研究』7, pp.23-30.
- 池田修 2010 「アルムファッダリーヤート試訳 (II-VIII)」『アラブ・イスラム研究』8, pp.1-19.